
日本 はじめました（改訂版）

たこわさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本 はじめました（改訂版）

【Zコード】

Z8581U

【作者名】

たこわさ

【あらすじ】

僕の家の近くにはシルバー農園があった……。始まりはおじいちゃん一人、おばあちゃん一人と一緒に。これは、古代日本にタイムスリップし“クニ”となつた主人公が、いろいろな経験を積みながら歴史を変えていく物語である。ほのぼのした国家運営ものを目指して。

ときどきイメージ写真があります。ご注意ください。

一章　一話　はじまつ日の日（前書き）

たこわせといいます。よろしくお願ひします。
感想・指摘お待ちしています。

この小説では登場人物の多くが方言（主に福岡地方）を話します。
方言が間違っている、意味がわからない、括弧の翻訳が邪魔、など
ご意見をいただければ参考にしたいと思います。

この物語はフィクションです。実在の人物・団体・国家・思想等
また本家様とはなんの関係もありません。ご了承ください。

一章　一話　はじまりの日

それは、ちょうど梅雨入り宣言がTVを賑わす、初夏のこと……。

僕が生まれ育った家のすぐ近くには、「シルバー農園」と看板のかかった畠があつた。定年退職した高齢者が老後を楽しく過ごすために取り分けられた、公民館の隣の小さな畠だ。

もつとも、そんな事情を知ったのは大人になつてからで、子供のころの僕にとってシルバー農園は、おじいちゃん・おばあちゃんたちに可愛がつてもらえる場所だつた。僕はシルバー農園に行くのが大好きだつたし、両親もそれを認めてくれていた。後から聞いた話では、両親は心配しつつも良い経験になると考えてくれていたようだ。

そういう訳で、僕は暇さえあれば畠に通う少し変な子になつた。
鍬を振るおじいちゃんを眺めたり、お茶を飲みつつ話をしたり、畠の端にどろ団子を並べたり、お菓子をもらつたりしていたのをよく覚えている。もう少し大きくなると、自分も畠仕事を手伝つようになった。今考えると、おぼつかない足取りで鍬を振り上げる子供な

んて、何の役にも立たなかつたのだろうけど、みんなから褒められて、誇らしい気持ちになつたものだつた。

そんなこんなで、僕と農園の関係はずつと切れないうまに、僕は学生服を着る年齢になり、働く年齢になつていた。農園に来るおじいちゃんたちもずいぶんと入れ替わつた。しかたのないことだとわかっていても、何度も涙で目を腫らしてお別れをした。

悲しいこともあつて、でもそれを含めて本当にたくさん経験と優しさをくれるシルーバー農園。子供のころとは色々なことが変わり、僕が顔を出せるのは仕事の合間を縫つた僅かな時間になつて、それでも僕と農園の繋がりは変わらなかつた。大人になるにつれてたくさんことを知つて、権利と義務がいくつも増えても、いやだからこそ、僕にとって農園で過ごす時間は大切でかけがえのないものだつた。

梅雨に入ったのが嘘のように、空は澄み切つていて太陽がジリジリと肌を焼いてくる。僕は一仕事終えて、畠の横の公民館で涼んでいた。隣では一緒に作業をしていた佐々木さんと稻じいちゃんが、畠に身を任せてくつろいでいる。汗をかいた後の心地よい疲労感を感じていたそんな畠下がり。さて麦茶を飲もうかと体を起こして、

ふと違和感を感じた。一瞬だけ立ちくらみを起こしたような、田の前にシャボンのまくが現れてはじけたような、不思議な感覚だ。この暑さで、思ったより疲れたのかもしれない。そんなことを考えていふと、ちょうどいい具合に冷たい風が入ってきて、火照った体を癒してくれた。

「久ちゃんおっとーねー？ ちょお来てみい」（久ちゃんいる？
ちょっとおいで）

氷でキンキンに冷えた麦茶を一気飲みしていると、外からさつちやんの声がした。ばあちゃんが「指名ばい、なんて軽口を稻じいちやんと叩きながらつつかけを履いて玄関をぐぐる。そこにはムツとした熱氣と照りつける日差しが……あるはずが、さわやかな風に熱気がさらわれたのか、公民館の中よりもよほど涼しい、程よい温度でなんだか拍子抜けだ。

「外のほうが気持ちいいじゃったーよーー」（外のほうが気持ちいいよ）

まだ部屋の中にいる佐々木さんたちに一声かけてから周りを見回す。さて、せつちゃんはどこだろ？

「いやちやんで。珍しかもん見れるばー」（いやひたひおこで。

珍しいものがみれるよ）

僕の声が聞こえたのか、本格的に探すまでもなくさつちゃんがもう一度声をかけてくれた。ちょうど公民館を出て左手の死角になつているあたりだ。そちらのほうに歩いていくとさつちゃんはいつも手招きをしながら、道の向かいの田んぼを指差していく……その先を目で追つた僕は言葉を失つた。

最近苗の植わつた田んぼが一つと、コンクリート固めの用水路一つを挟んだところ。そこにある田んぼのなかがあたりを境田に、見渡す限りの森が広がつていた。

「やつせすつと涼しくなりんしゃつたでしょ。それからずつと見えるとよ。ほら久ちゃんもよつ見とかんと、いつ消えるかわからんよ」

驚きすげて息を吸つたまま固まつた僕の耳に、蜃氣楼なんて見たことなかろうなんて声が届く。ああそつかこれは蜃氣楼か、蜃氣楼ね。蜃氣楼なら仕方ないね……。

ああもつ、さつちゃんも八十を超えてさすがに田^トが悪くなつたのか、それとも僕の田^トがおかしいのか。さすがに田んぼ一つはさんだくらこの距離くらこ見通せるといふか、明らかに蜃氣楼とか言つては質量感がありすぎるとこいつか。

…………さつちゃん、あの森、何度見ても本物に見えるんだけど。

一章　一話　はじまりの日（後書き）

川口咲江（81）

さつちゃん。

主人公が物心ついたころから知っているおばあちゃん。

歳の近いおばあちゃんたちからさつちゃんと呼ばれていたので、子供時代の主人公もそれを真似た（田舎ではよくあること）。今さら川口さんとか違和感がありすぎて呼べない。

子供好きで、主人公が成人した今でも本当の孫のように気にかけている。

一話 はじまつの中

………… サツちゃん、あの森、本物に見えるんだけど。

見間違いかと儚い希望に賭けて目をこすってみる。もう一度見上げた先にはやはり、幻影でもなんでもなく本物の大木が、まるで初めからそこにあつたようにずっとじりと据わっていて、その奥には見えないほど遠くまで続く森……いやまるで樹海のような大森林が広がっていた。

「稻じいちゃん…？ ちよつ つて あれつ」

後ろから近づいてくる人影に話しかけようとしても、混乱してうまく言葉が出ない。振り向いた先では、佐々木さんも稻じいちゃんも田んぼの先を見て畠然としていた。常識的な反応に少しほつてしまひ。というか、サツちゃんが天然なのを忘れていた。

「とりあえず、あのへん調べてくるけん」

少し冷静さをとりもどして、僕が最初にすべきだと思ったのは田の前の森の確認だった。とりあえずそんなに距離があるわけじゃない。田んぼの間のあぜ道を通って、用水路の上まで来ると、田んぼと森の境目がずっとはつきりする。

ほとんど期待してはいなかつたけど、近くで見てみるとなあさら
森はリアルだつた。田んぼはなかばで完全に無くなつていて、代わ
りに落ち葉が積み重なつた地面になつてゐる。それが幻でないのを
証明するよつに、田んぼから森のほうに少しずつ水が染み出してい
つていた。森の奥を覗いてみると、遠田に見たときと同じく切れ目
など期待できそくにないほど延々と緑色の世界が広がつていた。雑
木林みたいな縁ではなくて……屋久杉がたくさん生えているような
……そう、ちよつびジブリ映画のものだけ姫に出てきたような神秘
的な光景だ。

あ、鳥が飛んでる。

どれほどそうして眺めていただらう。体感的にはずいぶんと長い
間呆けていた気がしたけれど、振り返つて公民館のほうを見てみると
と、さつちゃんたちの立ち位置がほとんどかわつていなかつた。ど
うやら、時間的にはたいしたことがなかつたらしい。そうして、ま
たあぜ道を戻ろうとして、今田何度田になるかわからない驚きの声
が出た。

今まで田の前の森にしか意識がいっていなかつたけど、考えてみ
れば可能性はあつたのだ。振り向いた僕の視界のなかで、公民館前
を通つて大通りにつながる道が、ふつつり切れてなくなつていた。

その後確認してみると、公民館前の道路はどひらの端もぱつゝと切れていて、その向こうには延々とあの森が続いていた。公民館の玄関側、道路から右に曲がって裏山を通る小道も結果は同じ。どの方向も大体公民館から同じくらいの距離をとつて、ふいに森になってしまっていた。公民館から小山を挟んだ向かいの僕の家も、あと少しというところで森に飲まれてしまっている。公民館備品の地図の上に線を引いてみると一目瞭然だつた。まるで円を描くように一部の土地が取り残されて、その周りが全部森になってしまっている。

その円の中心は、公民館だった。

とりあえず公民館周りの調査と分析が片付いたころ、太陽は大分西に傾いていた。

「十五少年漂流記みたかねえ」（十五少年漂流記みたいだねえ）

お茶を飲みながら、さつちゃんがぼそつとつぶやいた。現状がわかるにつれて暗くなつていた部屋の空気が少し和らぐ。わざとなんだつたらすごいけど、たぶん天然なんだろうなあ。さつちゃんだし。

「歳を考ええ、歳を。だいたい久坊はよつついでこんから」

「いやいや、さすがに知つとるよ。現代っ子は本を読まないとか偏見やけんね」

せつかく変わった空氣に稻じいちゃんと僕がのつかった。佐々木

さんは会話にこそ入つてこないけど、向こうで思いつきり笑つてい
る。口数は多くないけどノリはいい人なのだ。

一通り笑つて場が明るくなつたところで、ああそうやうと、ちつ
ちやんが切り出した。

「ひさ今日久ちゃんが来るち聞いて、おこにわ炊いてきたとよ。明日ま
ではようもたんけ、ここで食べんね」（明日までは持ち帰つにな
から、ここで食べませんか）

そう言つて、風呂敷で包んだ土鍋を持つてくる。ちやんのお
こわは本格的で、僕が小さいころからの大好物なのだ。それをわざ
わざ持つて来てくれたらしい。

「本当にー? 嬉しかあ」

思わず口元がにやけて、笑われてしまつた。でも、僕の好物が食
べられるのは横に置いても、まともなご飯が食べられるのは嬉しい。
正直、まだ青い野菜をかじる羽田になるかと思つていたけど、とり
あえず今晚はまだ避けられそうだ。

「じゃ、わしが水汲んできましょ」

玄関に近かつた佐々木さんがそう言つて立ち上がつた。僕が行き
ますよと腰を上げるけど、ええから休んどきなさい、とやんわり断
られてしまう。ちなみに佐々木さんが行つたのは、裏庭の湧き水の
ところだ。昔から水が枯れないことで有名な泉で、今はコンクリー
トで周りを固めてプールのようになつてゐる。広いお風呂くらいの
大きさの水槽がいくつか並んでいて、湧き出し口に近いところから
順番に水がたまつていぐ。そして最後に用水路を通して田んぼに流

れ込むという塩梅だ。『先祖様たちの感謝の気持ちか、奥には小さな祠があつた。とはいへ今では夏に涼をとる格好のスポットだ。上には藤棚があつて、こんな田舎にはもつたいないくらい豪華な休憩所になつてゐる。いや田舎だからこそなのかも知れないけれど。

それはともかく、森に切り取られてしまつたのは道路だけでなかつたのか、蛇口をひねつても水が出ないし、スイッチを入れても電気がつかない（森との境目で電線が綺麗に切れて垂れ下がつていた。水道も似たようなものだろう）今、変わらず水を出してくれる裏の泉は僕たちの生命線だ。

ああそつだ、僕はお箸とお茶碗を取つてこよ。

一話 はじまりの日（後書き）

稻富 太郎（76）

稲じいちゃん。

主人公のご近所さんで、小さいころからよく面倒をみてもらっていた。

農園で会つたのではなく、主人公に誘われて農園に入つた。色々教わつたり頼りにしたりはしているけど、日ごろの関係は悪友のそれ。主人公が昔、ヘリコプターの本当の名前はヘコリプターなんだと信じていたのはだいたいこの人のせい。

四のこまじつの中

「じゃ、わしが水汲んできましょ」

佐々木さんがそういって立ち上がった……。

全員分の食器を取りに行つたのはいいけれど、よく使うコップはともかくその他の食器は埃をかぶっていたので、結局僕も洗い物に行くことになった。といつか、手を洗いに結局全員が湧き水のお世話になつた。こうしてちょっと手間がかかるだけで、田口の意識せずにつついていた水道のありがたみが身にしみてくる。

やうこいつている間に、今晩のご飯が行き渡つた。と言つても、おこわをお茶碗によそおつて、コップに湧き水をくんだだけの質素なものだ。もちろんそんなことを言つていられる状況ではないし、むしろとてもありがたいことだとは思つけども。

「わっちゃん、僕のだけご飯多かよ

問題は、明らかに僕のお茶碗だけご飯がたくさんつがれてこゐる」とだ。

「なん言つとつとね。食べ盛りこまちちゃんと食べると、よう持たんばー?」

「つたぐ、一丁前に遠慮なんぞしてから。ハゲるや」

稻じいぢやんにばしんと背中を叩かれる。食べ盛りはもうそろそろ過ぎたんじゃないとか、そんなことで禿げてたまるかとか、色々言いたいこともあるけど、ぐつと飲み込んで心遣いに甘えることにした。

「じゃあ、いただきます」

「川口さんありがと」

「はい、いただいくだわい」

久しぶりのさつやんのおこわを食べる。香ばしい醤油と新鮮な筍の風味、それに鶏肉がいい味を出していて本当に美味しい。

なぜかふっと、机の向かいに両親を思い浮かべてしまった。つんと鼻にこみ上げてくるものがあつて、急いで思考を切り替える。今はまだ気持ちの整理がつかないし、何が起こったかもよくわからないうちからウジウジ悩んでもしかたない、と思つ。

「やうごえーば、岡本さんどこのアイガモはどうあると?..」

何度もまばたきをして気持ちを切り替えていると、三方向から視線を感じて、慌てて出たのはそんなセリフだった。いかにも見え透いた方向転換だつたけど、得心した顔でそれに乗つてもらえて、何も聞かれない優しさが、今の僕にはありがたかつた。ちなみに岡本さんの田んぼは、公民館から見て斜め向かいの五枚で、内一枚は森の中、一枚は半分以上が侵食されている。無事なのは手前の二枚だけだ。しばらく前からアイガモ農法をやっていて、小さな雛たちが泳いでいるのをついさつきも確認している。

「夜はここに上げてやつたぼつがいいかもわからんね」

佐々木さんが口を開いた。

「電氣がこれじゃあ柵の電流も期待できんしなあ」

いくら引いてもうんともすんとも言わない電氣の紐に、自然と視線が集まる。確かに、田んぼを囲っている電線に電氣が流れていなければ、鼬いたちでもなんでも入り放題だ。

「久坊、ご飯食い終わつたら捕まえ行くぞ」

稲じいちゃんが、僕の方を見てニヤつと笑った。

アイガモの子供たちも自分たちだけでいるのは不安だつたのか、想像していたほどの苦労もなく捕獲作戦は完了した。泥だらけになることも覚悟していたからほつとした気分だ。

もしかしたら田んぼを出て、森に迷い込んだ子もいるかもしれないけど、それはもうしかない。外も大概暗くなつてきたし、今か

ら森の中まで探すのはさすがに無理といつものだ。

見つかったアイガモは九羽だった。玄関をくぐつすぐの、土間の一角に囲いを作つて寝床にしてやる。その辺の家具なんかを組み合わせただけの簡単な囲いだけ、アイガモの子はまだ両手で包めるくらいに小さいし、人懐こいからこれで大丈夫だと思いたい。一応下には古新聞を敷いて、お椀に水を入れておいた。もちろん、間違つて外に出てしまわないように戸締りの確認も忘れない。

そうしておいて、僕たちは和室で雑魚寝することにした。不幸中の幸いというのだろうか。今はだから布団の心配をしなくても十分寝れる。寝転がると泥のにおいがするし、ところどころさく立つたり染みが付いたりしている和室だが、大人四人が寝転がつても十一分におつりがくる程度にはスペースがある。それに僕にとってこの場所は、物心付いたころから慣れ親しんだ、もしかすると家よりも落ち着けるかもしねれない部屋だった。

ひつして、遠くにかかるの声を聞きながら、僕たちの新しい生活の一日目が終わっていく。そういうえば災害用の避難セットはどうにしまつてあつただろう、そんなことをぼんやりと考えている間に、僕の意識は段々と薄れていったのだった。

今日は疲れた。おやすみなさい。

三話 はじめての日（後編）

佐々木 忠彦（68）

佐々木さん。最近定年退職して農園組みになった。
基本的にあまりしゃべらない人で聞き上手。動物好き。

四話 少しずつ前に

異変から一週間 公民館

「あの田」から一週間がたつた。足りないもの、できないうじごがたくさんあって、精神的にもかなりきてるけど、生活パターンだけはなんとか安定してきたと思う。

水は裏から汲めるし、食事も何とか田処がついた。災害時用のパンが見つかって、裏山の梅や野いちご、それから桑の実も食べられる。それに農園のジャガイモも少し掘り出して使えたし、カブや大根を食べればお腹が膨れた。よそ様の畠から押借することになってしまったけど、特別事態ということで勘弁してほしい。

それから、近くに川が見つかった。雨が降る前には遠くの音が聞こえるというけれど、ちょうどそんな感じで水の流れるような音が聞こえてきて、見つけることができたのだ。そのまま飲めそうなくらい透き通った渓流で、ジャンプではたぶん渡れないだろう程度の広さがある。今は沢蟹をとるくらいしかしていないけど、近いうちに魚や貝が食べられるかもしれない。

公民館にはガスコンロと簡単な調理器具があつたから、今のところ料理には困っていない。ただ、これからのことを考えると、かまどを作つておいた方がいいんじやないか、といふことも話しあつた。これから課題にしていくつもりだ。調味料もなんとか補充のめどをたたせたい。

他にも、朝起きたらワジオ体操をすること。アイガモを田んぼに放して、夜は連れて帰ること。お風呂がないのでタオルで体を拭くようにすること、などなどいろいろと決まりをつくつていった。ちなみにお風呂は我慢するしかなかつたけど、ほつとんトイレはそのまま使うことができた。とはいっても、水は流れないのでバケツを用意しておいて自分で水をかけるようにしてある。子供のころに経験した水不足を思い出して、なんだか懐かしい。

異変から一週間 シルバー農園

僕は愛用の麦藁帽子をかぶつて、農園の草むしりをしていた。時々出てくる芋虫や夜盗虫を、道路にぽいつと捨てていく。

公民館の周りに取り残された土地の中で、まともに残っている畑や田んぼは実は少ない。具体的には田んぼと畠がそれぞれ二つづつだ。他の田んぼは件並み途中で切れてしまつて、水が森のほうに染

み出してこる。境目に板が何かをはさんでやればいいんだろハナビ、そんな道具も余裕もないこの状況じゃあきらめるしかない。

そういうわけで、取り残された合計四つの田畠（内一つはシルバーネー農園）。何度も話し合った結果、僕たちはそれを借りて使わせてもらうこととした。本来の持ち主はこの場にいなから事後承諾になってしまっけど、現状では伺いを立てることもできないし、考えたくないけども一度と会えない可能性だってある。それに、このまま放置してダメにするくらいなら、預かって有効に使わせてもらおうというわけだ。

多少良心が痛まなくもないけれど、岡本さん（＊田んぼの持ち主）も気のいい人だから、もし再会できたら笑つて許してくれると思つ。たぶんだけど。

そんなこんなで、僕たちの一日のスケジュールを一番多く埋めているのは、農作業ということになつていて。僕も今は農園にいるけど、これが終わつたら少し休憩して、岡本さんの方の田んぼをみて回る予定だ。ジャンボタニシを捨てたりピンク色の卵をつぶしたりしないといけない。もちろんこのまま雨が降らなければだけだ。

今日の予定を思い出しながら何気なく田んぼの方を見て、僕は自分の目を疑つた。もう散々驚いて、少々のことでは動じないとthoughtいたんだけど、それでもなかつたらしい。

「佐々木さん、佐々木さん。ちょっと

一緒に作業している佐々木さんを、小声で呼ぶ。佐々木さんは草刈鎌を置いて、こちらに来てくれた。

「あれ、見えます？ 気がついたらおつたとばって……」

僕が田んぼの一点を指差すと、一泊置いて佐々木さんも息を飲んだのがわかった。やっぱり、僕の勘違いというわけではないらしい。

「あれ、やっぱりトキかいな

僕の問いかけに佐々木さんは、トキだらなあと呟いた。思わず田を見合わせてしまう。

そんな僕らを尻目に、その赤ら顔をした白い鳥・なんだか思つていたよりも首あたりが黒くて薄汚れたかんじだった・はしばらく田んぼの中を歩き回っていたが、何かを捕まえたかと思うと翼を広げて、森の向こうへ優雅に飛んでいつてしまつたのだった。

さて、夕飯を食べながら今日のことを話し合つた。トキらしき鳥を見かけたことで、僕たちがどうなったのかを知る手がかりが一つ増えたのだ。

そもそも、今まで僕たちは公民館の周りを取り残して町が、ひいては日本が森に飲みこまれたんじゃないかと考えていた。ところが、日本にトキはいない。少なくとも僕の知る限り、日本のトキはもう絶滅しているはずだ。

そこで、森が出現したのではなく、僕たちの方が移動したとは考えられないだろうか。というのも、日本トキとほとんど同じ見た目の種が、たしか中国にいたはずなのだ。もしここが中国の奥地で、人里離れた森の中に僕たちの方が現れたとしたら、「あの日」を境に気温が下がっていることなどなど、いくつかの辻褄が合つ気がする。

もつとも十分に荒唐無稽な話しだし、どうして移動したのかとか、というような肝心なことは何もわからない仮説だけど、今まで考えていた説より説得力がある気がするのだ。それに、これが眞実に近いなら、僕たちは家に帰ることができるかもしないし、家族は友達は、今も生きていることになる……。それは僕たちの前に差し込んだ、かすかな希望の光に見えたのだった。

五話 少しずつ前に

「あの日」から大体一ヶ月がたつた。曜日の感覚が狂ってしまった正確な日付はわからないけど、今はたぶん七月の下旬、具体的には一十日前後だと思つ。

最近田んぼでたまに、トキやサギを見かけるようになつた。トキが来ても前ほど驚くことはなくなつたけど、テンショーンがあがるのは変わらない。チリメンジциальнにカーを見つけた時くらいはわくわくする。

さて、最近僕たちの食生活はずいぶんと豊かになつた。

まず、とうとう魚を手に入れることに成功した。川に竹やら石やらでV字型の囲いを作つて、そこに魚を追い込むのだ。昔ウルルン滯在記かなにかのテレビで見た知識を元に、試行錯誤してなんとか作り上げることができた（主にやつたのは稻じいちゃんだけど）。なかなかの大物が普通に泳いでいるし、あまり人間に警戒心がないのか結構簡単に誘導することができる。とれた魚はお腹を開いて焼き魚にするか、ぶつ切りにして煮込んで食べるといい具合だった。

それから、最近山椒魚が美味しいことに気がついてしまつた。見た目が見た目だからなかなか手を出す勇気が出なかつたけど、今ではもつと早くから食べておきたかったと後悔している。身はくせがなくて上品な味がするし、お腹に包丁を差し込むと本当に山椒みた

いなにおいがして食欲をそそつてくる。しかも皮はモチモチしてまた美味しい。ここに来て、川底を探せば案外簡単につかまるものだから、欲を出して取りすぎてしまわないよう自制するのが大変なくらいだ。料理法は素直に焼くか、煮込むか。煮込んだときは一晩寝かせると特別美味しくなった。

特に大山椒魚おおさとじょの親戚と思われる大物は絶品で、三・四十センチくらいの山椒魚を煮込み料理にしてみると、ほろほろとして格別な味がする。これにはみんなまいりてしまつて、お祝い事なんかがあつた時の特別料理にすることが決まったのだった。

少し日を戻せば、野菜もずいぶんと充実してきた。農園からはジヤガイモを全部掘り出して公民館にしまつてあるし、隅に植えてある「ボウもすくすく育つってきた。さすがに根っこはまだまだ早いけど葉っぱも十分食べられるのだ。今となつては貴重な葉野菜である。キュウリとミニトマトもきちんと実を付けて、ここ何日かの食卓を賑わしてくれている。公民館の裏庭と借り物の畠では、ミニウガが旬を迎えていて、農園と借り物の畠…長いから畠にしよう…では力ボチャの実が膨らんできている。

料理も手馴れてきたのがどんどん美味しくなった。改めて見てみれば意外と味にこだわっているとも思う。なにしろ畠にはミニウガにニラ、ネギ・ノビルにシソ、と薬味も多いし、唐辛子もとれるし。最近はデザートにマクワウリ・セツバナリしたメロンのような瓜・が出来るくらいだ。

じばらくはお米がたべられないのが残念だけだ、今はジャガイモがあるしもう少しすればカボチャが、そして秋にはサトイモとサツマイモがとれる見通しだ。もっともそのころにはお米も収穫できるだろうけども。

そんな訳で初め心配していたほど食べ物の心配はなくなつて、多少不便な思いをするにしてもきちんと生きていけることがわかつてきた。畑や田んぼが一緒にあつて本当に良かったと思う。もしも着の身着のまま放り出されていたらと思と、ぞつとする話だ。今日はちょっと贅沢を……なんて言つている余裕はなかつただろう。

着の身着のまま思い出したけれど、今僕たちの生活は衣食住の内、食と住に關してそれなりに恵まれている。でも衣服だけはどうしようもなく低い水準のままだった。さつちゃんを含めて僕たちが持つている服は「あの日」着ていた作業着が一そろえだけ。着替えなんて持つてきていなかつたし公民館にも置いていなかつた。

当然ながら、そして残念なことに僕たちの服はこの一ヶ月変わつていない。なるべく毎日水洗いをしてはいるけれど、天気によつてはそうもいかないし、冬場のことを考えると服は手に入れておきた。かといって、糸も布もなければ針もないところから服がつくれるわけもなく、たまにアイディアを出し合つては撃沈しているのだった。

それから……僕たちの、家族が増えた。

始まりは川に魚を取りに行つた佐々木さんが、げつそりと痩せた子猫をつれて帰つてきたことだつた。たぶんどこの飼い猫の子供で、「あの日」巻き込まれてしまつたんだろう。その子はずいぶんと衰弱していた。生まれたてというほどではないけども、まだまだ大人（成猫）になりきれていない体で急に森に放り出されでは、狩もままならなかつたに違いない。川の近くの木陰でぐつたりしているのでを見つけたそうだ。

公民館にくればなにかしてあげられたのに、と思った。でも佐々木さんの言うには、たぶん捨てられた（子猫田線）ショックで人間を避けたんじゃないのか、とのことだつた。かく言う佐々木さんの家は僕たちの間では有名な猫屋敷で、子猫の扱いもなれたものだつたし、実際同じような子を保護したことも何度かあるらしい。

濡れタオルで田やにをぬぐつてやって、鼻に水をつけてやるとペロリと舌を出して子猫がなめる。それを一時間も繰り返すと少し元気になつたのか、お皿から直接水を飲んだ。猫には生肉が何よりの病院食ということで、山椒魚を捕まえてきて、みじん切りにした内蔵を出してやる。初めは警戒していたけど、しばらくほおつておくと内臓の入つた小皿は空になつた。

佐々木さんによれば、この状態でも体力が回復するかはわからぬといふことだつたけど、僕たちの心配をよそに子猫はだんだん元気になつて、三日もすると公民館の中を歩き回るまでになつっていた。

そして今、公民館には三匹の猫が出入りしている。ひとつやら巻き込まれた猫はあの子だけではなかつたらしい。ミケと名づけた子猫はすっかり元気になつて、今は毎日魚や山椒魚や茹でたじじみ貝な

んかをあげているのだが、猫には猫のネットワークがあるのか、はたまた匂いを嗅ぎつけたのか、気が付けば餌をもらいにやってくる猫が一匹増え一匹増え、仲良く頭を並べて餌をむしゃむしゃやるようになつたのだ。ちなみに後からきた一匹は若いけど立派な成猫で、クロとブチ、と呼んでいる。安直？ 気にしない気にしない。

しかし後から考えると、いいタイミングだったと思う。あの時ミケの命は風前の灯だつたし、逆にもつと早くに猫たちを餌付けしていたらまだ小さかったアイガモが傷つけられていたかもしれない。今はもう襲える大きさじゃないから安心だ。あ、そもそも餌がなかつたか。猫は野菜を消化できないといつ話だし。

まあともかく、僕たちの生活は充実していて、新しい家族も増えました。大変なことも辛いときもあるけど、僕は元気にやつ正在すという、そんなお話を。

六話 本日ハ晴天也

「カーフ 暑か」

稻じいちゃんがタオルで顔を拭いてぐつと背伸びをした。

「お疲れ様ー ほい水筒」

返事をしながら僕も、首にかけたタオルで汗をぬぐつ。ついでに置いてあつた水筒を稻じいちゃんにパスする。「あの日」からこつち、多少過ごしやすい気温になつたとはいえそれはそれ。夏はやつぱり暑いし、最近は梅雨明けのギラギラした日差しのかわりに湿気が多くて蒸してくる。麦藁帽子をしていふとはいへしばらく作業をしていれば、あつといつまに汗だくだ。田んぼの中の作業というと足元が涼しそうに聞こえるけど、長靴を履いているからむしろ下方から蒸してくる。裸足でやれば気持ちいいんだろうけど、怪我とか虫とか、何より平口・ひらくち（マムシ）・が怖くてさすがにできない。ここは何かあれば病院で治療が受けられる文明社会ではないのだから。

「やつぱりまだあるねえ

田んぼの中で拾つてきたジャンボタニシを放つて踏み潰す。と、近くのアイガモが寄つてきてあつという間に殻だけになつてしまつた。ついでに近くの子をなげてやる。最近はこの子達も大きくなつたし、危険そうな動物も見かけないということで、あえて公民館に上げてやることもなくなつた。その分苦労は減つたけど、こうして

かまつてやれる時間も少なくなつて寂しい限りだ。

「大分減つたばつて、敵もなかなかしぶといばい」

稻じいちゃんがターシの殻を見て、笑いながらそんなことをいう。僕も全面的に賛成だ。またつぐ、この二ヶ月ちょっと付きつきりで相手をしているのにいつたゞから湧いてくるのやう。じつはターシの方がゴキブリよりもしぶといんじやないかと思つてしまふ。とはいえ成果が出ていないわけじゃなく、ここ最近は田を凝らして探しまわらないと見つからない程度にまで減つている。かなうなら、このままいなくなつてもらえるとなおありがたい。

「一回汗流してきてもよか?」

あぜ道に腰を下ろして水筒のお水を飲んでいる稻じいちゃんに話しかける。ちなみに僕は「ころんと大の字だ。しめつたTシャツが肌にはりついで気持ち悪い。いまさら汗が汚いとは思わないけど、さすがに一度水浴びしてさっぱりしたい。風が吹けば涼しいとはいえ、服のべたつきと蝉の合唱で、不快指数は五割増しだ。

「おひつかよか、俺もいくばい」

稻じいちゃんものつてくる。よっこいしょつと立ち上がり、差し出された水筒を受け取った。僕も一口飲んだ後、水筒のふたを振り回して水気をとぼす。

「稲じいちゃん、今日の晩なんがよか?」（なにがいい?）

テ「コテ」と公民館に帰るあぜ道を歩きつつ、聞いてみる。今日は僕が料理当番なのだ。……なんでもいいのか、ふむ。予想通りの答えだ。正直期待はしていなかつた。

「昨日山椒魚を焼いたがのこつと一けん。後は馬鈴薯・ばれいしょ（じゃがいも）・をふかして……いやもつたいないか。キュウリ何本いけそう?」

馬鈴薯は来年の（それまでに助かるのが理想ではあるけど）種芋のことを考へると、そろそろ考へて食べないといけない。無くなればスーパーで買つてくるなんて訳にはいかないんだから。

「五本はあつたばい。 ああそれからトマトもそろそろ取つちやらんと」

「ならそれで。ミョウガと紫蘇と入れて和えよっか

つらつらと考えている間に、すぐ泉のところに帰ってきて、ついでに今晚の献立が決まつてしまつた。昨日の山椒魚をぶつ切りにして炒めなおして……うん、ゴボウ菜と大根を刻んで山椒魚の炒め物にしよう。それから、キュウリの和え物にミニトマトを添えて、カブを焼こうかな。お塩も節約しないとなあ。

「そうだ、今田くんを探りにきたいんよ。覚えといて」

「若えモンが覚えとかんでどうするか?」

稻じいちゃんと掛け合ひながら服を脱いで、バシャッと頭から水をかぶる。さすがは湧き水、夏だというのに思わず体が縮こまるような冷たさだ。……羞恥心? そんなものは小学生のころに捨ててきた。泉の端に腰掛けて濡らしたタオルで体を拭くと、汗のべたつきがさつと引いて気持ちがいい。ちなみに、当然といえば当然だけど僕たちが水浴びをしているのは、飲料水をとる水槽よりも一段低い場所だ。さすがに、自分の汗やら泥やらが混じった水を飲みたいとは思わない。

……ついでにさつき脱いだTシャツとズボンと下着を忘れずに洗つておく。せっかくわざぱりしたのに汗臭い服を着るのはごめんだし、きつく絞つて日向に干しておけば、作業に戻るころにはそれなりに水が飛ぶのだ。もちろん絞るときは縦で。雑巾絞りと同じで、親指同士がくつつくような絞り方だと水気が残つて乾きが悪い。

あーそういうえば縦に絞るとよく水を切れるってテレビで知つたんだよなあ。あの番組まだやつてたつて。金太郎ゲームとか懐かしいなあ。

さりせりと流れる水で手を冷やしながら、カーッと答える。特に何事もない、八月の昼下がりの光景だ。

……あ。

「稻じこけさん」

「ん？ ビうしたね」

「なんか、ほれ頭の上。トンボがとまらんしゃった」

うふ。特に何事もない、八月の昼下がりだ。

「」の後やぶ蚊の群れに襲われなければよかつたんだけど、まあのんびりとしたいのちの一日マ。

びゅうっと音を立てて風のカムイ様がとおつていぐ。田のカムイ様はとうにいなくなつてしまつて、私は木の洞の中で身を小さくして震えていた。ああ山のカムイ様、樹木のカムイ様、月のカムイ様、私を守つてください……もう何度目かわからない祈りを、私をつむカムイ様にわざげる。

村ではきっと私が帰つてこなくて大騒ぎだろ。スイちゃんには誰かお乳を飲ませてくれているかしら。心配事をひとつ思いつくともういけなかつた。どんどんと不安が大きくなつて、よけいに心細くなつてくる。

怖いよ。お母さん、お姉ちゃん……。口に出してつぶやいてみても、帰つてくるのはひょうひょうといつ風の音だけ。道を覚えるのが下手なのはわかつっていたのに、お姉ちゃんとはぐれてしまった時から、きっとこうなることは決まつていたんだ。

ひざを抱えて涙を服に吸い込ませると、布にこすれてまぶたが赤くなるのがわかつた。それがまた悲しくて後から後から涙が出てくる。

ふと。

風の音に混じつて、何かの音が聞こえた気がした。

一年目 九月上旬

それは、稲じいちゃんの提案から始まった。お米の穂がだんだん大きくなってきたころ、かなかなか蝉の声を聞きながら、公民館で夕涼みをしていたときの話だ。だんだん涼しくなってきたねえ、なんていう取りとめのない話が途切れ、気まずくも落着いた沈黙が流れたとき。隣からポソリと声がした。

「……そういえば久坊」

なん？ と返事をすると稲じいちゃんは、今年は夏祭りがないなあと呟いたのだった。

「たしかに。残念やけどそんないふうに言つとられんしねえ」

僕の答えに稲じいちゃんはもつ一度、夏祭りがないなあと呟いた。

「なあ、久坊。太鼓ばあつたなあ」

確かに公民館の敷地内には倉庫があつて、中では大太鼓が埃をかぶつているはずだ。町内で小さなイベントやお祭りがあるときに、引っ張り出して使う太鼓だ。

「ははっ ついひだけで盛り上がるかいな」

僕がそう返すと稲じいちゃんはこつと笑った。さすがに、そこまでヒントをもらえば稲じいちゃんの考えていることぐらいにわかる

つてもんだ。盛り上がるかじやなか、盛り上げるつたい、と息巻く
稲じいちゃんに僕もにつと笑い返した。いいねそういうの、嫌いじ
やない。

それから数日後。お昼を過ぎてしばらくしてから僕たちは”夏祭
り”の準備を始めていた。倉庫を開いてえつちらおつちらと大太鼓
を持ち出していく。会場は公民館の駐車場と目の前の道路。駐車場
の真ん中よりすこし道路側に太鼓の台を設置した。本当は鉄パイプ
を組み立ててつくる檣^{やぐら}もあつたけど、人数が人数だからそこまでは
やらない。いつもなら檣の周りにたらす紅白の幕は、かわりに公民
館の軒^{のき}に縛り付けた。

一番の力仕事が終わつたら、今度はさつちゃんと一緒に台所にこ
もる。昨日作つて一晩置いた大山椒魚の煮込みに火を入れなおしつ
つ、1cm程度に切つてそろえた小ネギをちらしていく。お箸でつ
ついてみると山椒魚の身もいい塩梅にホロホロだし、サイコロ状の
カブにもしつかり味がしみているらしい。一口味見をしてみると、
カブやゴボウの風味と一緒に山椒魚や貝の旨みが食欲をそそぐ
る。ほんのりきいた塩味と干し梅の酸味が味を引き立てていて、ピ
リッとした唐辛子の刺激がたまらない。一緒に食べられるように、
よく洗つたミニウガをせん切りにして小皿に盛つておく。それから
干し梅の種を抜いて、同じくせん切りにしておいた。隣の鍋を見る
と、カタカタと蓋がなつてている。竹で作った即席スノコをしいて、
ジャガイモとカボチャをふかしているのだ。この分だと、時間には
余裕で間に合うだろう。ジャガイモは数が心もとなくなつてきてい

るけど、今日は大奮発だ。あ、サワガニを洗ってるんだった。逃げ出していか見に行かないと……。

-ドン ドン ドン-

-タカ タッタ-

-ドンドン ド ドン-

日がだんだん傾いてきたころ、”夏祭り”が始まった。何日かけて準備したご馳走をつまみつつ、太鼓を叩いて好きなように踊る。阿波踊りらしきものをしてみたり、ドジョウ掬いをやってみたり、はたまた日本舞踊や歌舞伎の真似をしてみたり、それとも何も考えずにその場のノリで踊つてみたり。公民館の屋根と近くの木の間にはロープやツタをかけて、提灯の変わりによくわからないオブジェや旗をいくつもぶら下げている。

空はだんだん暗くなつて、山際がうつすらと明るいだけになつてしまつた。といつても、祭りの本番はこれからだ。疲れたら休憩をはさみつつ、交代しながらみんなで叩く太鼓の音が、子氣味良いリズムでお腹に響いてくる。空はおあつらえ向きに晴れていて、視線を上げれば円になりかけの月が良く見えた。気の早い星もいくつか

顔を出している。お酒がないのは残念だけど、本当に残念だけど、これで楽しめなくちゃ九州男児がするつていうもんだろう。例えそれがたった四人の夏祭りだったとしても……。

子供でも知っていることだけど、楽しい時間というのはあつとう間に過ぎていく。あたりが真っ暗闇になつてからしばらくたつた。最近今まで以上に早寝早起きが習慣づいていたせいか、深夜特有の変なテンションになりつつもだんだんまぶたが重くなつてくる。“それ”に気がついたのは、お腹も膨れ満足するまで踊り、もう少ししたらお開きにしようか、といつ空気になつたころのことだった。

眠気が空のかなたへ飛んでいつて、かわりに、背中をツーッと冷たいものが流れていく。

僕たちは四人。この場に見えるのも四人。僕以外気づいていないようだし、どこもおかしいところは無いように見えるが少し待つてほしい。僕たちの中には当然僕も入っているわけで、そして自分の

視界に自分が入ることは鏡でもない限りありえないわけで、ここに鏡は無いわけだ。

まずは落ち着こう。深呼吸をしてお茶・湧き水で冷やしたとつておきのどくだみ茶・を一杯飲んで、改めて数えてる。まず僕が一人、うつかり忘れないように最初に数に入れておく。それから今は太鼓を叩いている佐々木さんが一人。結構さまになつた踊りをしているさつちゃんでもう一人。太鼓に合わせて歌つて踊れる祭りの漢おとここと稲じいちゃんが一人。……一緒に踊っている人影が一人。

やつぱりおかしい。とくに最後あたりどう考へてもおかしい。なんか普通に踊つてるし、暗いから顔とかよくわからないし、あんまり頭が働いてないしで今まで気づかなかつたんだろうけどなんか増えている！ これは、あれだろ？ 口ウソクを一本ずつ消していくと最後に知らないお友達が増えているようなあれなんだろうか。いやそういうのが好きな人にはたまらないのかもしれないけども、残念ながら僕はそういう人種じゃない。どちらかといふと話が終わるまで部屋の隅でガタガタ震えているようなタイプだ。むしろ真っ先に部屋から出て行くタイプだ。あいにくと嬉しくもなんとも無い。

戦々恐々としながらも、僕はその人（？）から目を離せないでいた。暗くてよく見えないけどたぶん 希望を含めて 足はあるし浮かんでもいい。背はあんまり高くなくて白っぽい服を着ている……と思つ。

声をかけるべきなのかやめておいた方がいいのか、神経をすり減らしつつ前に一步出てやつぱり勇気が出ずに一步下がつて、ということを繰り返していくと……。

踊っていた那人（？）は、何かにつまづいたのかズベツとこけたのだった。

一章 七話 月の綺麗な夜に（後書き）

・干し梅

梅の実を干したもの。梅干を乾燥させたいわゆる「干し梅」ではなく、梅の実を使ったドライフルーツ。すっぱい。塩は使っていない。

本田 久（24）

本作の主人公。小さなころからおじいちゃん・おばあちゃん達と遊んでいたため、考え方や知識が一般的な同級生から見て少しづれている。

八話 月の綺麗な夜に

木の洞の中で膝を抱えていると、風のカムイ様が通り過ぎる音に混じって、何かの音が流れてきた。顔を上げて、耳を澄ませてみれば、ドン ドンと遠くの方から響いてくる。

もしかしたら誰かが、迎えに来てくれたのかもしれない！ 不安な気持ちを押し殺して、そっと洞を抜け出した。……あっちだ。お月様が隠れてしまわないように祈りながら、音のまつに歩いていく。

しばらく森の中を進んでいくと、音はだんだん近くなってきた。それにつれて、まるで雷様が落ちたときのように、体が震えるのがわかった。ドン ドン、という響きに合わせて体がジーンとなる。この先にいるのが、私を探しに来てくれた人たちじゃないことは、とうにわかってしまった。

-森の奥にはえらいカムイ様がいるからね。勝手に入つてはいけないんだよ - ふいに、おばあちゃんの言つていたことを思い出した。でも、止まろうと、これ以上近づいてはいけないとと思うのに、私の足は言つことを聞いてくれない。焦る思いにそっぽを向いて、私の体はまるで音が鳴るぼうに引き寄せられるようになってしまった。

僕の目の前で不審な人（仮）影が転んだ。それはもう漫画かコントのような綺麗な転び方だつた。駐車場の草が生えたところだつたからよかつたけども、これが道路の上とかだったら膝小僧が大変なことになつていただろ。アスファルトの上でこけるのはいたいのだ。

そんなことはともかくとして、さすがに僕もいきなり転ぶとは思つていなかつたし、さつちゃんたちも転んだ”誰か”に気がついたみたいだ。さつきまで景気良く拍をとつていた太鼓の音が止んで、痛いくらいに静かになつた駐車場。さつきまではあまり聞こえなかつた虫の音に背を押されて、おそるおそる近づいてみる。草の上に倒れたとはいえ、なにかの弾みで怪我をしたかもしれないし。

僕がその人（仮）のところについた時には、初めから近くで踊つていた稻じいちゃんと佐々木さんはもうその人（仮）の傍にいて、さつちゃんがしゃがんで声をかけているところだつた。転んだ姿勢のまま、上半身だけを起こして、おろおろと周りを見回しているその人・近くで見るとちゃんと足があるし透けてもいなくて、目は二つ、口は一つだった・はどうやら中学生か高校生くらいの女の子のようだつた。どことなくアジア風に見える質素でゆつたりしたワンピースを着ていて、丸く可愛らしい顔立ちの中に揺れる不安そうな目が印象的だつた。女の子はいかにも動搖した雰囲気で、僕たちの顔を順番に見回している。隣にしゃがんださつちゃんが、ゆっくり背中をさすつてあげていた。

しばらぐやうしていると、女の子も少し落ち着いてきたようだつ

た。僕たちは変に刺激しなによつに一歩下がつたところで見守つて、さつちゃんが時々「どうしたんね?」とか「どこか痛か?」とか優しく話しかけている。女の子はもう一度僕たちを見回して、さつちゃんの方に向き直つてから、初めて口を開いた。それは少し幼さがのじつた柔らかい声で……。

「なあば ふちかむいか?」

若干予想はしていたけども、何を言つているのか全くわからなかつた。

さつちゃん・稻じいちゃん・佐々木さん、と順繰りに顔を見合わせるけど、やつぱり誰もわからなかつたみたいだ。うすうすそんな気はしていたけど、ここは日本じゃないんだろう。女の子の言葉は日本語とも中国語とも、もちろん英語とも違つていて、強いて言つなら韓国語の発音を柔らかくして、話す速度をゆっくりにしたような感じだった。もしくは、鹿児島とか東北とかのお年寄りが使うこつてこての方言に近いかもしれない。あくまでイメージだけれども。

「なあば ふちかむいか?」

さつきよつ小さな声で女の子が繰り返した。なんとなく何かを質問されているのはわかるんだけども、いかんせん肝心な内容がわからぬから答えようが無い。さつちゃんもどうしようか、と困つているようだつた。ただ、このまま返事をしないのはよろしくない気がする。僕はそう思つたし、さつちゃんも同じだつたんだろう。女の子に声をかけよつとして、か細い声に遮られた。

「なあば むういか?」

女の子の声は震えていて、ほんと泣きそつた具合だった。たぶんさつきから何度も出てきた”ナアバ”つていつのま、さつちゃんのことなんだと想ひ。女の子は話すときに色々身振りをしていて、”ナアバ”と言つときには必ずさつちゃんを指差しているからだ。その後はなんていったかわからぬけど、たぶんさつちゃんが返事をしないから不安に思つたんだろう、とこいつとは想像できた。

「大丈夫よ、なあんも怖かことなかよ」

その辺はさつちゃんも気づいたんだろう。とこいつより、子供のお世話に関して僕が気づけたことに、さつちゃんが気づかないはずがない。さつちゃんが声をかけつつ背中をトントンと叩いてから、ぎゅっと優しく抱きしめてあげると、女の子はしばらくしてまた落ち着いてきた。でも、やっぱり言葉は通じないみたいだ。

さうしていふとふと気配を感じて、振り向くとこいつの間にか佐々木さんが僕の横に立つていた。心臓に悪いからやめてほしい。はい、とお茶が入ったコップを渡される。佐々木さんを見ると、田でさつちゃんの方を示された。……こいつこいつちょっととした気配りは、ほんとにかなわないなあと想ひ。佐々木さんの意を受けて、女の子を怖がらせないよううに近づいて、さつちゃんにコップを手渡した。さつちゃんは小声でありがとう、と語つて女の子にコップをあげている。

最初は躊躇していたようだけど、さつちゃんに身振り手振りで説得？されて、女の子はお茶を一口飲んだ。たぶん喉が渴いていたんだと思つ。一口飲んだ後は一息にお茶を飲み干して、それで安心したのかコップを握り締めたまま夢の世界に旅立ってしまった。

「ちつともー。起いれんよつてね」

ひそひそ声でさつちゃんが注意する。その後、眠ってしまった女の子はさつちゃんに任せて、僕たちはとりあえず太鼓やらなんやらを片付けた。本当は後回しにしたかったけども、寝ている間に雨でも降つたら一大事だ。一通り屋根の下に運び込んだ後、今度は女の子を稻じいちゃんがかかえて寝る部屋まで運ぶことになり、今に至る。ところどころさくられ立つた畳の綺麗なところを選んで、稻じいちゃんがそつと女の子を下ろした。お役御免になつた懐中電灯を消して、節約のために電池を抜き取る。部屋の中はあつという間に真つ暗になつた。一泊置いてだんだんと日が暗さに慣れてくる。

「おつかれさん。俺らもねよつかね」

稻じいちゃんが、最後に女の子の頭を一なでしてから立ち上がつた。最近はだいたい決まつてきた”自分の寝場所”に陣取つて、いつもどおり雑魚寝する。さつちゃんだけは、女の子の傍で添い寝するみたいだ。

なんだか今日は大変だった。お祭りは全力で楽しんだし、現地の人……だろう子と初めて会つて、言葉が通じないままその子は寝てしまつて……。親御さんが心配しているだろつし、早く家に帰してあげないとなあ。どこから来たんだろう、今まで近くに人は住んでいないんだとばかり思つていたけど、案外近くに村があつたんだなあ。それに、聞いたことの無い言葉だつたけど、いつたいここはどこなんだろつ……。

だめだ、頭が働かなくなつてた。それじゃあ、おやすみなさい。

八話　月の綺麗な夜に（後書き）

・森の奥には……

子供に言つことを聞かせるためのテンプレート。
わがままばつかり言つてるとお化けに食べられちゃうよー、みた
いな。

女の子が話している言語は結構適当です。専門的な知識のある方には突っ込みどころしかないと思いますが、ファイクションということで流していただければ幸いです。また、繰り返しますが適当ですので、そういう言葉があるんだ、と誤解しないようお願ひいたします。

九話 たんとお食べ？

明け方。人の動く気配がして、僕はつづくらと目を開けた。同時に思つたより低い气温に体を縮こまらせた。早朝にしか味わえない清々（すがすが）しい空氣と、おもわず小さな声で話してしまうような静けさが、少しずつ眠氣を吸いとつていつた。そろそろ日が昇るのか、窓から見える空はほのかに青い。

いつも通りの時間といえばそつなんだけど、昨日も遅かつたし正直もう少し寝ていたかった。心の中でぼやきつつ、目が覚めてしまったのはしょうがない。一度気合を入れてからよつここしょ、と体をおこした。当社比一割り増しにだらしない胡坐あぐらをかけて、時々体をほぐしながらぼけーっとする。だんだんと頭がさえてきて、ふと”彼女”と目が合つた。

どうやら田が覚めたらしい昨日の女の子の田は、改めてみてもやつぱり不安そうだった。まあ、言葉が通じない上に朝おきたら知らない部屋、という状況で不安になるなという方が酷な話かもしい。さてどうしようか、稲じいちゃんはトイレにでも行ったのか部屋にいない。佐々木さんはまだ寝ているし……と、改めて見てみると、わっちゃんが女の子の隣で僕に手招きをしていた。とりあえず呼ばれてしまつたので、膝立ちでわっちゃんの方に行く。

「おはようついでこまーす
「ねむ

お互ににあこねつをじつひ、毗毗毘の距離で座る。うーん、弟

みたいな近所の子はいたけど妹はになかったから、こまごま距離感がつかめない。

「今ねえ、お前は聞くことったどな

どしたん?、と聞くとわいわいやんな女の子の頭をなでて、もう言つた。こいつたこいつたわいわいやんは話をつけたのか、わすがのわいわいやんだ。

「ホノ」わいわいこいつよな?」

わいわいやんが名前を強調しつつ女の子に聞くと、その子……ホノわいわい小さくつむぎした。

「ああば

世の

血分をわしてホノわいやんが言つ。なるほど、わうして意識してみれば、名前だけは聞き取れた。

「なあば わわばさん?」

今度はわいわいやんを示してわいわいした。昨日も思つたかび、わいわい「なあば」は「あなた」という意味な気がする。するとわいわい言つていた「ああば」は「わたし」かもしれない。「ばん」は……わからない。わいわいやんはどこまで解つてこるのか、わざとよかよ、と言つてホノわいやんをなでていた。

「なあば わわばさん?」

ホノちゃんが聞きなおすと、さつちゃんは相好を崩して「うんうん、うなずく。いつの間に仲良くなつたのか、はたから見ていると、二人はまるで仲のいいおばあちゃんと孫みたいだ。そこに、さつき見た不安そうな色は無くて少しほつとする。と、いつのまにかさつちやんが、ここにこして僕を見ていることに気がついた。まあ、僕を呼んだのはそういうことなんだろう。

「はじめまして、ひさし といいます。……えっと、”ああばひさし” あつてるかな?」

改めてホノちゃんの顔を見てから、自分を指してそう言ひ。ホノちゃんも、さつちゃんも、後半のところで少し驚いた顔をした。

「なあば ひさしざん?」

ホノちゃんがやつぱり聞いてくるので僕はそれに大きくなづいた。よかつた、正しいかどうかはともかく、しつかり意味は通じたみたいだ。相手の名前がわかつて、自分の名前を呼んでもらえる……。今まで意識したことはあまり無かつたけど、それだけでぐつと距離が縮まつた気がするから不思議なものだ。だから、僕もお返しに名前を呼んだ。

「僕も、ホノちゃん つち呼んでよか?」

どこまで伝わったか解らないけど、ホノちゃんは、うん、どうなさいた。他人に押しつけるわけじゃないけども、子供は笑顔なのが一番だと思う。少なくとも、不安そうな顔よりはずつと。

その後、帰ってきた稻じいちゃん、おきてきた佐々木さんもそれ自身紹介をして、寒い寒いと言いながら水浴びとトイレを済ませて、僕たちは今、日課のラジオ体操をしている。ちなみにホノちゃんには、さつちゃんがつつききりでここでの“いろは”を教えてあげていた。さつきさつちゃんに聞いたけど、ホノちゃんはトイレの使い方を知らなかつた……というか便器を見たことがない様子だつたらしい。さすがに詳しくは聞かなかつたけど、やっぱりここはどこかの国の奥地みたいだ。

こつち、にい、さん、じい

じー、ろく、しち、はち

にい、にい、さん、じい

じー、ろく、しち、はち

さつちゃんがホノちゃんにお手本を見せて、ホノちゃんがそれを真似して……というのを繰り返しつつ、いつもよりのんびりしたペースで僕たちはラジオ体操を進めていった。別に音楽を流してやつているわけじゃないから、多少時間がかかるてもあせらない。見よう見まねで体操をしたり、掛け声に加わったりするホノちゃんは、すごく癒しオーラをだしていると思う。僕だけじゃなくて、稻じいちゃんも佐々木さんも、目じりが下がっていて、さつちゃんは言わ

ずもがなだ。年頃の女の子に失礼かもしれないけど、小学校低学年の子が一生懸命体操しているのを応援しているような気分に……いや、せつちやんたちのあれば孫娘を見守る日かもしれない。

ともかくとして、一通りラジオ体操をこなした後、かるく柔軟体操をして朝の準備運動は終了だ。

今日はじはんの当番じゃないからちょっとゆったりできる。とりあえず配膳だけしておいて……あ、ホノちゃんの分の食器を洗つとかないといけない。早めに気がついてよかつた。取りに行つてこよう。

今日の朝ごはんのメインは一口カボチャだった。昨日食べ切れなかつたあまり物だ。それに（まだ小ぶりな）サツマイモの輪切りを焼いたのが一人二切れと干し梅が少々、他あまり物が小皿に少し、昨日のサワガニ汁にタニシ（川でとれた巻貝、田んぼの憎いやつではない）を足したものがついている。昨日が昨日だったおかげで、朝ごはんにしてはずいぶんと豪華だ。ホノちゃんの歓迎もかねてられちょうど良かつたと思う。カボチャとサツマイモの黄色が鮮やかで美味しそうだ。

みんなでそろって、いただきます、をする。

「はんあい！」

おやるおやる、といった感じではじめにサツマイモを食べたホノちゃんが、びっくりしたような声を上げた。顔色をうかがつてみると、さつきまで匂いをかいだり色々な角度から見たりして調べていたのが嘘のようだ、キラキラした目をしてサツマイモをながめる。その様子を見る限り、悪い意味の言葉ではなさそうだった。こんな食べ物見たことが無い！　という様子だったし、口に合わなかつたらどうしようか、という思いは杞憂だったみたいだ。自然（その様子を温かい皿で見守っていた）僕たちも笑顔になる。ほかにもいくつか食べた後、やっぱりサツマイモがお気に入りだつたようなので、ホノちゃんのお皿にはお芋さんが積み上げられた。ダメだこの人たち、降つて湧いた可愛い孫（くらいの子）に骨抜きにされてしまっている。

僕はおじいちゃんバカ、おばあちゃんバカ全開の三人に呆れてしまって、ついついサツマイモを一枚とも寄付してしまった。

その後ホノちゃんがお箸に興味を示し・それまでは手で摘んで食べていていた、僕たちがお手本を示しながら一生懸命使い方を教えることになるのだけれど、それはまた別のお話。

九話　たんとお食べ？（後書き）

という訳で、きちんとはじめてをする第九話でした。新キャラの名前はホノちゃんです。彼女の最後のセリフを考えるだけで、いつたい何時間かかったことか……。

楽しい食事が終わり人心地付いたところで、改めてホノちゃんと
の”お話”をすることになった。とはいって、僕たちが……少なくとも僕がわかるホノちゃんの言葉は「ああば（わたし）」と「なあば（あなた）」だけ、逆にホノちゃんが理解できていそうな僕たちの言葉は「これ」と「う」だけだ。お互いがよく使う、簡単なセリフを覚えたかたちになるわけだけど、なるべく楽観的に見たとしても会話が進む気がしない。

そもそも、食事中にまぎりなりにも意思の疎通がとれたのは、身振り手振りと表情（顔芸）と、それから現物・目の前のご飯・を話題にできたからだった。正直、半分以上はノリと雰囲気だったと思う。が、僕たちがホノちゃんに聞きたいのは、どこから来たのか、とか、これからどうするのか、とかそういう抽象的なことだ。外国语を覚えたければ現地に行けばいい、とはよく聞くけども、基本的な単語もわからない、ガイド本もないし教えてくれる人もいない、というこの状況は、あまりにもよろしくない。

そんな悩みを解決してくれたのは、意外といつかむしろ頼当とうか迷うが、さつちやんだった。

さつちやんいわく、言葉が通じないなら筆談をすればいいじゃない、ということだった。もちろんお互いの文字が通じるなどとは、

はながら考へていな。同じ筆を使つたしても、絵を通じた”お話”だ。

まず、裏の白いチラシとボールペンを準備する。さつき朝はんを食べた机……そりいえばこれはなんていう名前なんだろう。細長い長方形でちやぶ台くらいの高さのやつで、宴会のときとかに引っ張り出すあれば……の上をきれいにして、”お話おえかき”道具をホノちゃんの前に並べていった。何がなにやらわからない、という顔をされたが、気持ちはわかる。

ともかく、やってみなければ、文字通り話にならない。ちなみに、質問をするのはさつきちゃんだ。絵が上手だし、一番ホノちゃんが緊張しない相手を選ぶとなると、どうしてもさつきちゃんになる。

あんね、と言つてさつきちゃんが紙の真ん中に家のマークをかいた。

「”これ”が”ここ”よ。わかる?」

地図の家マークを指してから足元を指す。ホノちゃんはあんまりわかっていないみたいだった。もつとも、言葉の通じない相手にこれだけすべてが伝わるなら、それは超能力のたぐいだろう。

「これが、ああば、ひさしばん、たろばん、ただばん、」

「ん、」

家の横にさつきちゃんと僕、稲じいちゃんと佐々木さんの似顔絵ができた。ホノちゃんにも、だんだん何がしたいのか伝わってきたようだ。感心したようにうなずいたり、絵と本物を見比べてくれます笑つたりしている。すごくデフォルメしてあって、しかも丁寧にかきこんだわけでもないのに、しっかりと誰かわかる程度に特徴をと

らえているんだからわざがだと思ひ。

それからさつちゃんは田んぼと川をかいていった。川はそれだけだとよくわからない一本線になってしまって、佐々木さんのアイデアを採用した結果、魚がはねているイラスト付だ。絵だけではわからないので、部屋の壁を使つてここからここまでくらい、と川の広さを説明する。正しく伝わったかどうかは、この際後回しだ。最後にホノちゃんの似顔絵が、家マークに向かつた矢印付きで、書き込まれた。横から見ているとまるで「このまちだいすき」みたいだ。

「これが、なあば、ホノちゃんはどうからきたと?」

ジースチャーをまじえつつ、さつちゃんがホノちゃんに質問する。一緒にボールペンも手渡した。

ホノちゃんはしばらく考えた後、ボールペンとこらめっこをしていた。くるくる回してみたり、指先にちょっとインクをつけてみたりしてボールペンを調べると、今度は紙が気になるのか表面を擦つて不思議そうな顔をしている。なんだか初めて鏡を見た子猫みたいで微笑ましい光景だった。

子猫で思に出したけど、昨日からうちの猫たちがあまり顔をみせてこない。まあほとんど放し飼いみたいな状態だから、ふらつといなくなることはあるんだけど、三匹とも一緒にいなくなるのは珍しい。さつき縁側にひょこつと出てきたクロ介も、これからを見て一瞬固まつたと思つとテロテロと庭を横切つてどこかにいつてしまつた。いつもだつたら縁側で田に向ほっこりでもしているのに珍しい。もしかしたら知らない人を見て、一丁前に緊張でもしてゐんだろうか。

われらが猫さんズのことはこの辺にして、ホノちゃんの話に戻ろ。ボールペンと紙をしばらくいじつて満足したのか、ホノちゃんは今絵をかいている。どうやらこちらの意図は伝わったようで、一安心だ。紙の右下のほうに海苔をまいた三角おにぎりのよつなのがいくつかできていく。力のこめすぎで紙をやぶるようなこともなく、ホノちゃんの筆の動きは危なげがない。少し考えながらも、その顔はどうことなく楽しそうで、もしかしたら絵をかくのが好きなのかもしれなかつた。

そうやって程なく出来上がつたのは、三角おにぎり五つと、少し離れて池らしきものが一つ。池（もしかしたら湖かもしれない）にはかわいらしい魚がおよいでいた。こちらのイラストの意味も正しく伝わついたらしい。村の左上のほうにあるのは……キノコだろうか？ さつちゃんがかいた公民館との間にあつて、おにぎり キノコ 公民館の順番に矢印がひかれている。

……このナ、実はとんでもなく頭がいいんじゃないだらうか。少なくとも僕に、言葉の通じない人がかいたイラストやら記号やらを、正しく理解できる自信はない。矢印つてのはもしかして全民族共通の記号なんだらうか。いやそんな馬鹿な。

「これ、家とちがうね」（家なんぢやないかな）

おにぎりを指して佐々木さんが言つた。危ないあぶない、思考が変な方にいつてしまつていた。

「吉野ケ里の……なんて名前だつたか、あの家が、こげん格好しどうでしよう」

佐々木さんが続ける。吉野ケ里……遺跡……豎穴式住居か！ そ

たてあなしき

う言われてみて視線を戻すと、確かにおにぎりは豊六式住居に、海苔はその入り口に見えてくる。すると、ホノちゃんが住んでいるのは、弥生時代くらいの文明の集落なんだろうか。それとも、実際に見てみると想像とは違った姿なのかもしない。今はアマゾンの奥地でもユニークな服が出回っているような時代だし。それとも、モングルのパオみたいな家なんだろうか……。

家の形はともかく、この絵を見る限り、そして自分の解読能力を信じる限り、どうやらホノちゃんは集落からキノコを取りに来て、どういう訳かここにたどり着いたということみたいだ。ここから歩いていける距離に集落があるのか……。

僕たちの町は自然と合わせた。

「ホノちゃんを村まで送りつけ。

初めにそう言つたのは誰だつただろ？ もしかしたら同時に言ったのかもしない。あるいは誰も口には出さなかつたのかもしれない。ともかく、僕たちの中に異議を唱える人はいなかつた。いくら一人でここまでこれたとはい、女の子を一人で森に帰してよいよなら、というわけにはいかない。安全対策っていうのは過剰なくらい、無駄になるくらいがちょうどいいのだ。それに、僕たち（証拠）がいれば、ホノちゃんも心配したであろう親御さんに事情を説明しやすいだらう。

とはい、その意見が100%純粹な善意から出た、といふと嘘になってしまつ。もちろんその気持ちは本当だけど、その裏でほんの少しの打算があるのも本当だつた。

だつて、いいかげんに寂しかつたのだ。

この何ヶ月も僕たちは外から切り離されて、四人だけで暮らしてきて。確かに楽しいことはたくさんあつた。これまで考えもしなかつたような貴重な体験をしたし、びっくりするほど綺麗な景色に何度もあつた。もともと絆はあつたけど、今ではもう、僕たちは本当の家族みたいなものだつた。

でも、きつとずつと寂しかつた。

家族と、友達と、会えずにいることだけじゃない。周りに人気がない・賑やかな場所に行けないと、思ひのほか寂しくて、思ひのほかこたえるのだ。今まで気づかずにいたけれど、ホノちゃんで、あつた今、もう見ないふりはできなくなつてしまつている。だって、ホノちゃんと話すのは、本当に楽しくて、嬉しかつた。それはもういい歳した大人がそろつて、ガラにもなくはしゃいでしまくらうに。今ならコミュニケーションの大事が、人間は社会の中で生きる生き物なんだつてことが、よくわかる。あくせくしているときは静かな時間が欲しくてたまらないくせに、きつと僕たちは本当の一人になつたら生きていけないし、家族といっただけでも満足できない、わがままで纖細な生き物なのだ。なんて。

だからホノちゃんと離れて、また孤立するのが怖かつた。自分が寂しがつていたことを知つてしまつたから。ホノちゃんの村と交流がもちたかつた。もう会えないかもしれない、というのには耐えられなかつたから。またね、といつて別れたかつたから。

だから、僕たちは満場一致でホノちゃんを送ることにする。道中

の心配と心からの感謝と、それから少しの期待をこめて……。

もつともその前に、僕たちの気持ちをホノちゃんに伝えて、ホノちゃんがどうしたいかを教えてもらつという大仕事が残っているのだけれど。

十話 お話をじよつ（後編） (あくひん)

- ・このまちだいすき
たんけんぼくのまち、でも可。何を見ていたかでだいたい歳がば
れる。
- ・猫さんズ
ミケ・クロ・ブチの三匹。主人公たち四人にはなついているもの
の、人間不信がなくなつたわけではない（飼い主に捨てられたと思
つて いるため）。

十一話 はじめまして

サラサラと流れる澄んだ川は、少しずつ幅を広げていった。といつても、まだまだ渓流か清流といったたたずまいだ。さっきから赤とんぼや塩辛とんぼ、それにいろんな種類の糸とんぼが、顔の前を横切つて挨拶をしては、またふつとどこかに飛んでいく。川幅が大きくなるにしたがって、とんぼの数も増えていくようだった。中には麦藁帽子の先にとまる可愛いやつもいる。

「ひゃー、無事に当たりをひいたりしい。

あひらひらを確認しては笑顔でうなずくホノちゃんを見て、そう思つた。僕たちには今までと同じ川原にしか見えないけども、ホノちゃんにひとつここは見知った景色でなのだろう。少し上流の滝を越えてからひつち、僕たちの気づけない”何か”を見つけて、彼女はずつと二三二三している。

探検の終わりは近い。

話は一日前にさかのぼる。

どうにかしてホノちゃんを村に届けられないか、という議題で僕たちは頭を突き合っていた。何度か確認を取つたけども、ホノちゃんは村にどうやって帰つたらいいかわからないらしい。もっとも、この辺は僕たちの解釈が正しければの話だが、どうやらキノコ採集中でたま迷子になつてしまつたようなのだ。こうなると、いよいよ一人で帰すわけにいかなくなつた。しかも、小さな弟か妹かを家に残してきているらしい。話してくれるまで気づけなかつたけど、そのことがずいぶんと気にかかるつているようだつた。

それで、何か手がかりがないかと長いこと会議を続けた結果、ホノちゃんの村はどうやらかなり低い土地にあることが分かつてきたり、三方向を低い山に囲まれた盆地に近い場所にあるらしい。そのことと、公民館がどうやら山の中にありそうなこと（ぱつと見気づきにくいけども、川がある側の森は緩やかな下り坂に、反対側は緩やかな上り坂になつてゐる）や、ホノちゃんが来た方向などなどを考え合わせた結果、いつも魚をとつてゐるあの川は、ホノちゃんの村の湖（ホノちゃんの表現を見る限りかなりの広さがあるらしい）についているんじゃないだろうかという仮説ができた。もしそうなら、川を伝つていけば迷わず村周辺に着くことになる。

ただし、川ぞいを下つていつたとして、もし見当違いの場所にながつっていた場合、骨折り損のくたびれ儲けになることも考へないといけない。そして、ここ数ヶ月の半サバイバル生活は、”体力”というやつは良く考えて使わないといけないことを教えてくれていた。なにしろ、重い風邪にかかりしたり、思わぬ怪我をしただけで「家族」に迷惑をかけるし、へたをしたらそのままゲームオーバーになりかねないのだ。もつと気楽に考えたいけれど、今は自分の行動に慎重すぎるくらいでいたほうがいい。

高いところに登れば村が見えるんじゃないか、といつアアイディアが出たのは、そろそろ田代が傾き始めるかも……といつじうだった。

よく考えてみれば、「宝島」「神秘の島」でも「ロビンソン漂流記」でも、高いところから周りを眺めて地形を把握するのは基本でないか！ そうして考えてみると、こちらに来てから数ヶ月間、今までそれを思いつかなかつたのが不思議だつた。善は急げとわざそく箇で裏山に入る。僕たちがえつちらおつちら山のてっぺんに着いたとき、稻じいちゃんはもつ背の高い木の上だつた。

「よお見えるばー。はよ登つてきなせー」（早く登つてきなせー）

稻じいちゃんがこひらに手招きをする。よほど集中しているのか、手招きをした腕以外は一切動かさず、ずっと遠くを睨みつけているようだつた。

僕たちは顔を見合させた。……これは、本当に期待できるかもしない！

最初に枝をつかんだのは僕だつた。そのすぐ後、さつちやんに促されてホノちゃんが上手にあとを追いかけてくる。佐々木さんはしばらくの間、さつき登つてきた山道のほうを向いて立つていたけど、ホノちゃんが登りきつてしまらしくしてから樹上の人になつた。道のほうに何か気になることがあつたんだろうか。ちなみにさつちやんは少し登つた後、上を行くんは無理ばい、と笑つて、見守る役に徹している。腰に無理はさせられないから、残念だけど仕方がない。

ホノちゃんが座った横枝よりも少し上。稲じいちゃんのそばの大枝を抱えて、懸垂の要領で体を持ち上げる。びゅうっと強い風が吹いてバランスを崩しそうになつたけど、腕と足に力を入れて、落ちないよう体勢を整え、やり過ごした。風は僕たちの体と木の枝を揺らして、そのまま西田のさす空に吸い込まれていく。来たよ、と稲じいちゃんに声をかけてから、枝に座りなおすと 僕の目に飛び込んできたのは、ため息が出るほど素晴らしい大パノラマだった。

眼下にはテレビでしか見たことの無いような大森林が、見渡す限り広がっていた。遠くに目をやれば霞がかつた濃緑色の山が連なつて、まるで水墨画のようにたたずんでいる。森を分ける何本かの溪流が、絵にアクセントを持たせていた。本当に見事な景色だが、残念ながら、今注目すべきなのはそこではない。僕たちの視線はただ一点、稲じいちゃんと同じ場所に集まっていた。

「」から幾分か離れた場所から、細い煙が何条か立ち上っている。距離があるのと間の木が大きいので見えにくいけども、煙の出所は平たい広場のような場所だつた。目を凝らせば森の切れ間から、建物らしき影を探すこともできる。その向こうには広々とした湖の水面が光を反射して、ときどきキラッと輝いていた。

「ホノちゃん、あれがホノちゃんの“ハル”？」

いつまでも呆けているわけにはいかない。念のため右下の枝に腰掛けるホノちゃんに確認してみると、多少自信はなさげだけども、多分そう、といった具合に肯きが帰ってきた。ちなみに、“ハル”というのは、ホノちゃんの言葉で（多分）「村」とか「里」に近い単語だ。もしかしたら「家」という意味かもしれない。例のおにぎり×5のような絵をさして、ホノちゃんが“ハル”と言うので、そういうことだと思って僕たちも使っているのだ。案外適当だけども、

意見の食い違いは 少なくとも表面上は おきていない。

改めて下を見てみると、先ほど予想したとおり公民館近くの川は”ハル”に向かって伸びていた。右側に大きく曲がっていて、幾分か遠回りになりそうではあるけれど、川沿いに行って、迷う心配はなさそうだ。

その後木を降りた僕たちは、やつちゃんに見えたものを報告して（木が邪魔なので下のほうではよく見えない）一度公民館に帰宅した。明日”ハル”に向かいたいことを、絵を使ってホノちゃんに説明する。紙の上では太陽が沈んで、月が出て、もう一度太陽が顔をのぞかせていた。

そして、冒頭に戻る。

ホノちゃんはプレゼントした麦藁帽子を飛ばされないように手で押さえながら、あっちに行つては帰つてきて、こっちに行つては帰つてきてを繰り返している。おとなしい子かと思つていたけど、昨日の木登りの様子といい、今日のこのはしづ様といい、なかなかどうじしてお転婆な子だったようだ。やっぱり緊張していたんだろう。

「大丈夫?」 「転ばんようにね」 「気をつけなよ」

通じないと分かつていても声をかけてしまつのが親心……いや保護者心というものだと思つ。本当を言えば、地元民のホノちゃんよ

りも僕らの足取りの方がよほど危なつかしいのだけれど、岩の上やら倒れた木の上やらによじ登るのをみるのはなかなか心臓に悪い。苔ですべらないかとヒヤヒヤするし、なによりホノちゃんは靴をはいていない。

そう、靴を履いていないのである。裸足なのである。

足の裏が頑丈なのか、特に怪我もなく森を抜け川原をずっと歩いたわけだけど、ふと足元が田に入るたびにどうしてもヤキモキしてしまう。公民館にいる間に余っている靴を勧めてみたりはしたんだけど、どうも足に合わなかつたようで裸足のままなのだ。本人がいらないと言うから仕方ないのだけど……材料と時間に都合がついたら草鞋を編んで再挑戦してみようと思つ。あれなら裸足に近い感覚で履けるはずだ。

そんな風に、はしゃぐホノちゃんを見ながら癒されたり、気を揉んだりしていると、ホノちゃんがあつと声をあげてこちらを見た。正確にはこちら側を向いたと言つたほうがいいかもしない。その視線の先はどうやら僕らからは少しづれていて……つられて振り向くと、ポカンとした顔でホノちゃんを見つめる壮年の男性が、木の陰から顔を覗かせていた。

十一話 はじめまして（後書き）

- ・佐々木さんはしばらくさつき登つてきた道のほうを……
ホノちゃんは膝丈くらこのワンピースで、木登りをしています。
お察しください。
- 特に意味はありませんが、下着が庶民に広がるのは江戸時代から
だそうです。

+ 一話 サンヌモント（漫畫モ）

作中に出て来る言語は架空のものです。

十一話 はじめまして

つらりと振り向くと、ポカンとした顔でホノちゃんを見つめる壯年の男性が、木の陰から顔を覗かせていた。

十一話 はじめまして

一瞬、辺りが静まりかえった。ツクツクボウシの鳴く声とサラサラという水音が、やけに大きく聞こえる。気温のわりに強い日差しが、ジリジリと肌を焼く音まで聞こえそうだった。

しかしそれも一瞬のこと、すぐに静寂は破られる。

「ホノ！」

それは、怒鳴り声でこそなかつたけれど、おもわずびくつと体がはねるような大声だつた。男の人は白の混じつた髪を振り乱し、落ち葉を跳ね飛ばしながらホノちゃんに駆け寄つて、体当たりでもするようにして抱きしめる。

「ホノつ しいホノ！」

何度もホノちゃんの名前を呼ぶその声は、だんだんと鼻声になつていいくのが分かつた。その、遠田でも分かるほど大きな隈をつくつた目元が、涙に濡れているだらうことは、背中越しからでも想像に難くない。ホノちゃんが何か言つているけども、抱きしめられてぐもつた声を、ここから聞き取ることはできなかつた。

二人はしばらくの間、抱き合つていた。多分、男性は村の人で、いなくなつたホノちゃんを探していたのだらう。もしかしたら家族の方なのかもしない。人の機敏を見るのが上手な方だとは思わなけれど、二人の再会を邪魔するほど”空気が読めない”わけではないつもりだつた。

どれほどそうしていただろう。ホノちゃんがそつと腕の中から抜け出して、男性に耳打ちをした。こうしてホノちゃんと並んでみると、意外と背が低い人だ。ホノちゃんもこまい（小さい）けれど、この人も僕 残念ながら日本人の平均身長にとどかない より少し目線が高い。160cm 弱くらいではないだらうか。とはいえた目だとそんなに小さい感じがしないのは、この人の纏う空気のせいかもしれない。背は確かに低いけど、いかにも骨太で丈夫そうな体や顔の下半分を隠す髪、それに力強く輝いた目が、迫力というか、貫禄というか、そういうた”でっかい”オーラをかもし出しているのだ。

そんな”でっかい”おじさんは、ホノちゃんの耳打ちをうけて僕らのほうを振り向いた。僕がとりあえず会釈をすると、同じように頭を下げるから、ホノちゃんを連れてゆつくり歩いてくる。おじさんと目が合つた。一步いっぽ川原を踏みしめてこちらに歩いてくるおじさんは、真剣そのもので正直ちょっと怖い。お辞儀を返してくれたし怒っているわけではないと思いたいけれど……。

おじさんの目力に負けそうになつたころ、僕たちの前で突然、おじさんが消えた。もちろん本当に消えたわけではなくて、視界を動かせば、おじさんは川原にしゃがんでいた。いや、ひざまづいていたという方が正しいかもしない。それは正座から片膝を立てて頭をたれた、時代劇の武士や騎士によく似合いつるな格好で。

「”ありがとう”」

急展開に目を白黒させる僕たちに、耳慣れた言葉が聞こえた。え？　とおじさんを見やる。おじさんは”ありがとう”とかされた声で繰り返した。その後ろからホノちゃんが”ありがとう”と言つて、おじさんと同じように膝をつく。そんな言葉、いつのまに覚えたのだろう。

「ありがとう」

この格好はホノちゃんたちにとって感謝を示す姿勢なのかもしれない。見よう見まねで同じ田線までしゃがみこんで、さつちゃんが、稲じいちゃんが、佐々木さんが、そして僕もそつ口にする。ありがとう、ありがとう。さつき静かだった川原はしばし、お互いの”ありがとう”で賑やかになつた。

まったく、不意打ちでなんて、反則だ。泣いちゃうしつじやないか。

その後それなりに緊張がほぐれてから、ホノちゃんを通訳、と言つていいのか分からぬけれど間に於いて、おじさんと簡単な自己紹介をした。今はおじさん……改め『アヤ』の”ニタばん”（以下ニタさん）につれられて、森の中の獸道のようなところを歩いていくところだ。『アヤ』がどういう意味かは結局わからなかつたけど、ニタさんは、なにかの役職についているのかもしれない。……本人が望んでいるからいいんだろうけど、父親くらいの年齢の初対面の人を”ニタばん”と呼ぶのは、あだ名で呼んでいるようで複雑だ。たぶん”ニタさん”というような意味だろうから、失礼ではないんだらつけど、思わぬところで言葉の壁に当たってしまった。

僕たちの前を歩くニタさんは、さつきは背中に回していた編み笠のよくなものをかぶつて、腰にさして石の手斧を抜き放つている。石斧^{せきふ}なんて、教科書の中と博物館でしか見たことがなかつたし、野蛮なイメージがあつたけど、ニタさんが時々藪や薦をはらうのに使うそれは、石でできていることを忘れるくらいこの場になじんでいた。“ごく普通の手斧か鉈だといわれても、多分すぐには気づけないと思う。”違和感のなさ”が逆に不自然に見えて、それが無性におかしかつた。

結局、森を抜けるまで僕たちとニタさんはあんまり話をしなかつた。一言一言話そうと思つても、お互^{たがい}い言葉が通じないから苦笑いで終わつてしまい長く続かない。ただ、道中木が倒れていたり、木の根が飛び出していたりして通りにくいところでは、ホノちゃんが、”だいじょぶ？”と声をかけてくれ、それに、”ありがとう”だとか、”大丈夫”だとか、返事をする場面は何度かあつた。”だいじょぶ”じゃなくて”だいじょーぶ”だよ、なんて無粋な指摘はない。ここにいるのは、多少発音が違つたところで可愛いなあとし

か思わないし、心配してもらつた事実だけで無駄に張り切つてしまふような、駄目な大人たちばかりなのだ。

「こまでも続くよつに思えた森は、しかし唐突に終わりを告げた。先導する二タさんが一度こちらに体ごと振り向いてから、森の外に出る。僕たちもそれに続いた。

バタバタッと音を立ててスズメの群れが舞い上がり、少し離れたところにまた舞い降りる。森から出でます目に飛び込んできたのは、金色に光る稻穂の群れだつた。日本のお米ではないのか、背がひょろつと高くて、株もあまり分かれていない。田んぼは土地を耕して作つたというより、もともと湿地だつた場所を盛り土で区切つて、そこに稻を植えたようだつた。右の奥に見える湖から水がしみてくるんだろ？

そして、二タさんが指をさしたその先。ここから田んぼの間を抜けてそう離れていない場所に、もう目的地は見えていた。周りよりも少しだけ高い場所ががならされていて、藁葺き屋根の枯れ草色が見えていた。

赤とんぼの群れをかき分けて集落に近づくにつれ、集落のこちら側の端にいくつかの人影が現れた。時間が経つにしたがつて、その数はだんだんと増えていく。中にはこちらに何かを叫ぶ人もいて、そんな中、二タさんが声を張り上げた。

「ホノばたあんば！」

騒ぎに気づいたのか、集落の奥のほうから、家の中から、あれよあれよという間に人が集まつてくる。集落の周りを囲つている背の低い柵から身を乗り出すようにして、こちらを見ているのが分かつた。

「ホノばたあんば！」

二タさんが腕を振り上げてもう一度叫ぶ。そして、両手をホノちゃんの脇にいれ、後ろからひよいと抱え上げた。びっくりするまもなく、集落からわあっと歓声が起こり、そのうち何人かは坂をこちらに駆け下りてくる。他の人たちも柵を乗りこえ、小走りでこちらに来るのが見えた。全部で中学校の一学年分くらいの人数にはなるんじゃないだろうか。

愛されてるなあ。

高いたかいから開放されたと思つたら、先頭を走つてきた女の子に抱きつかれ、後から後からやつてくる人たちにもみくちゃにされるホノちゃんを見て、そう思つた。

十一話はじめまして（後書き）

今回すこし難産でした……。つまくまとまらない的な意味で。「ここがおかしいとかあれば、指摘してもらえたると助かります。（今回に限った話ではないですが）

ああ文才が欲しい……。

十三話 ありがとう

楽しかことはね、足元さ転がつとーとよ。

ひーちゃんは、そいば見つけるんが、ちかつぱ上手か。よう覚えといで、そのまま田のよか大人になりんしゃい。

小セレーニ、瓜生のうりゅうおばちゃんの膝は僕の特等席だつた。

思い返せば昔の遊びに始まり、ご飯の作り方から子供なりの人生相談まで、おばちゃんは両親以外で最初の、そしてとても尊敬できる先生だった。もともと小学校で教鞭をとつていて一本芯の通つた人だったから、厳しいことを言われたこともあつたと思つ。それでも、いやそんなところも含めて、僕はおばちゃんが大好きだった。両親などなど周りの話を聞くに、一時期は金魚の糞のようにしてついて回つていたらしい。

おばちゃんは僕が小学校に上がつたころ亡くなつて、もう会うことできないけれど。おばちゃんといつしょにいられた時間は、間違いなく「僕」の中に流れ、「僕」を形づくつている。無意識に三角食べをしていることに気がついた時なんかは、それを思つてニヤニヤするのだ。

はい、とお酒のおかわりが注がれる。せっかくすつとかいがいしく世話をしてくれるおばさんには、ありがとうございます、とお礼を言って、お茶碗のような杯を一口傾けた。お酒といいつつふやけたお粥のようなそれは、おおよそ飲み物とは言えない「食感」のこしつつも、優しい甘さになつてとけていく。面白いことにこの器、こちらの言葉でも「サカツキ」と呼ぶらしい。他の単語は通じないところに、こんなところで通じ合えるとは、言葉については不思議なものだ。

気がつけば、ホノちゃんの村にやってきて半日近くがたち、ギラギラしていた太陽もようやくおとなしくなってきた。僕たちは村の人たちに囲まれて、集落の中の広場で、ちょっとした宴会に参加している最中だ。地べたにござを敷いてわいわいとお酒を飲むのは、どことなく花見の席のよつとも見える。いや、時期的には紅葉狩りだらうが。

事ここにいたるまでは、話せば長くなるのだが……正直なところあまり記憶がさだかでない。はじめに、ホノちゃんにたかつていた人たちがあたらしいターゲット（ぼくたち）に気がついた。たぶんホノちゃんが何かを言ったのだと思う。その後の展開は想像

通り、ホノちゃんと同じく歓迎の洗礼をうけて、おしゃくら饅頭状態だ。しかもそのまま集落の中につれてこられて、あつちこっちに案内された……と思つ。ここにくるまでいろいろと想像を膨らませてきたのに、いざ案内されてみれば、久しぶりに感じる人ごみの熱気に圧倒されて、ふわふわしているうちに時間が経ってしまったのが残念だ。気がつけばこうして広場のじざに座つていた。

そんな中はつきり分かつたことといえば、ここの人たちが素朴で陽気で、ついでおひとよしということくらいだろうか。僕たちの周囲はしばらく満員電車のような人口密度になっていたけど、そんな中で移動しても誰も怪我をしなかつたし、背が低くて中が見えないからか肩車をもらつている人もちらほらいて、なにより皆が笑顔だつた。そろつて背が低くて頭と目が大きい彼らは、にかつと笑うと独特の愛嬌がある。僕はその笑顔がいつぺんに好きになつてしまつた。

さて、この騒ぎの中ホノちゃんはどうしているかといふと、じつはこれがなかなか大変そうだ。家族や旦那さんと談笑してはいるものの、かわるがわる村の人來ては、背中を叩いたり頭をなでたりして絡んでいる。勝手な想像だけど、この集まりがホノちゃんの帰りをお祝いする会なのだとしたら、無事に主役を果たしているといつたところだろうか。

……ところで、さらつとながしてしまつたが、ホノちゃんの「旦那さん」についても語つておかなければならないだろう。彼は、僕たちが広場につれてこられたころに、（おそらく）集落の外から走

りこんできた。かと思うとホノちゃんに抱きつき、勢い余つて押し倒すという衝撃的な登場をした人物だ。カジくんというらしい。

年のころはホノちゃんと同じ、それとも少し高いくらいだろうか。まわりの大人たちに遜色ないがつしりした体と顔つきで、しつかりした若者といった風情の少年だ。とはいっても、初めのうちホノちゃんとカジくんの関係は、お互いの外見年齢もあって、仲のいい兄妹だとばかり思っていた。ところがしばらく一緒にいる間に、いつの間にか腕に抱いた赤ちゃん　ヌイちゃんといいうらしい　の世話を2人でし、どころかホノちゃんがあっぱいをあげているとなると、そもそも言つていられない。ちなみに、当のヌイちゃんは、今はホノちゃんの膝の上でお休みしている。

なるほど公民館にいた間、小さな弟か妹をえらく心配している、と思つたらこの子のことだつたらしい。しかし、よくて中学生、へたをしたら背の高い小学生にも見えるホノちゃんが、普通に既婚者で一児の母というのは、なんというか、どうなんだろうか。もつとも、そんなことは関係なく本人たちは心から幸せそうで、だからこれはたぶん、日本の文化圏で生まれ育つたゆえの違和感なんだと思う。カルチャーショックというやつなのかもしれない。実際ホノちゃんのほかにも、同じくらいの年齢で赤ちゃんを抱っこしている女の子を何人かみかけた。ここではそれが普通なんだろう。

ついでながら、さつき抱かせてもらつたホノちゃんの子供は、それはそれは可愛かった。まだまだ人見知りをしない時期なのか、ほつぺたをつついても、ちいさな手と握手をしても、ふにやつと笑ってくれる。それを見ているホノちゃんは凄くやせしい目をしていて、幼いながら確かに「お母さん」な表情だつた。この子がホノちゃんの子供だと確信を持てたのはそのときだつたと思つ。

ふと気が付けば、空はすいぶんと色を濃くしていた。気の早い口ウモリが一生懸命羽ばたくのを見ながら、もう一口お酒を呑む。

「これは空が広くて綺麗だ。どうやつてか意氣投合したらしく、知らないおじさんとお酒をあおつている稻じいちゃんから田線を上げれば、丸く縁取られた天蓋が広がっている。ぐるりと囲む辺際はぼほを染めて、天頂の藍色から薄い茜色へ、見事なグラデーションがかかっていた。

「おつかれやーん」

両手にお土産を抱えて帰つてきたさつちやんに声をかける。

「はい、ただいまやん」

荷物を二つたん置いて、さつちやんが隣に腰を下ろした。どうやら、僕たちの代表はさつちやんだと思われているようだ。それはおおむね正解なわけだが、ホノちゃんと同じく挨拶攻撃にさらされていたのだ。お土産はそのままに手渡されたらしい。

「騒がしかねえ」

さつちやんが田を細めてやついた。視線を追つて、僕も周りを見渡してみる。

「ほんに騒がしか

本来ならあんまりいい意味の言葉じゃないかもしない。それで
もうこの瞬間、僕たちにとって、”騒がしい”は最高の褒め言葉だつ
た。

「”ただばん” 起きんねー？」

せつかぐの大騒ぎを寝過ごしてしまっている佐々木さんの腕をペ
チペチャやって、起こす努力をしてみるものの、反応する気配すらな
い。もう何度もそうしたとおりに、僕はため息をついた。空氣に流
されたのか、飲みなれないお酒を立てづけに一杯やつてから、ず
つとこの調子で熟睡しているのだ。普段から、おれは下戸だから…
…、とアルコールを口にしない人だったけど、まさかここまでとは
思っていなかつた。このお酒、度数はかなり低い気がするのだけど。

逆に、挨拶に来た人たちから何度もお酌をされているくせに、顔
色一つ変わっていないさつちゃんのうわばみ具合は、通常営業だ。
並み居る男共を飲み比べでのした、なんて昔の武勇伝を聞いたこと
があるけれど、実際さつちゃんがへべれけになつたところを見たこ
とは一度もない。この程度じゃ「飲んだ」内にはいらないんだろう
が。

「お団子もらつたばつて、つつかんね

さつちゃんに言われて食べたお団子は、ちょっと渋くて硬かつた
けど、素朴で優しい味がした。

そうこうするうちに時間は過ぎてゆき、誰かが歌を歌い始めたのをきっかけに、焚き火を囲んだ踊りが始まった。初め三人で始まつたその輪には、一人、また一人と人が増えていく。

もう離さないばかりにヌイちゃんを片手で抱きしめたホノちゃんが、踊りの中に飛び込んだのと、僕たちが輪の一員になつたのは、くしくもほとんど同じタイミングだった。

やんやんやんやと踊り明かしていくうちに、日はとっぷり暮れていく。フイロロロロと虫の音を聞きながら、パチパチ爆ぜる焚き火の音をBGMに、誰かの歌う知らない音楽に合わせて、昼間の疲れを忘れたように、僕たちは踊つて踊つて踊つた。言葉は通じなくとも人のぬくもりが伝わってくる、この笑顔が素敵な人たちと踊れる幸せを噛みしめながら。

さて、明日は筋肉痛だ。

十三話 ありがとう（後書き）

ホノちゃん

主人公たちが最初に出会った現地の人。ちんまいけど、華奢ではない。小学生にも見える幼顔だが、頭も切れるし結構肝も据わっている。現代日本にいれば結婚できる年齢ではない。

カジくん

ホノちゃんの旦那さん。イメージはドカベンを少しほつそりさせた感じ。ホノちゃんと同じく日本で結婚できる年齢ではないが、歳相応以上にしつかり者。登場時に取り乱していたのは、生存が絶望的だったホノちゃんに再会できたからで、本来はとても穏やかな性格。

ヌイちゃん

上2人の間にできた男の子。とても可愛い。

この3人を含め現地の人たちは基本的に、アイヌ人・琉球人・ポリネシア人+江戸の人々をモデルにしています。

十四話 秋深く……

夜ふと目が覚めると、遠くで、それとも驚くほど近くで、遠吠えが聞こえることがある。

初めてのころは訳もなく動搖したものだけど、今ではその声も頬もしく感じるのだから不思議なものだ。なれてしまっただけじゃない。「彼」が近くにいるとわかるとなんだか見守られている気がして、微笑ましい気持ちと同時に安心感が湧いてくるのだ。

力は強いくせに、妙に恥ずかしがりやで、なかなか姿を見せてくれない「彼」。僕たちは勝手に「タロ（太郎）」と呼んでいる。昔博多のおじさんが飼っていた秋田犬くらいの大きさで、この辺の山犬を何匹も従えていた立派なボス犬だ。日本犬と違つてしまはまつすぐ垂れていて、足が長く耳つきが鋭く、たてがみのようにも見える首筋の長い毛にすらつとした鼻立ちの精悍な顔をしてい。

急に襲われるんじゃないか、うちの子たち（アイガモとか）を食べられるんじゃないかと心配したのも今は昔。

森にいる間はこつそり後ろから見守ってくれたり、お礼に時々食事をおすそ分けしたり、そんな間柄の頼れる隣人だ。

宴が明けて次の日。なれない場所で寝たせいか、日が昇るころにはもう目が冴えていた。しかし、布団無しで眠れる季節もそろそろ終わりかもしけないな……なんてことを思つ。

ぐつとのびをして、早朝の冷たい空気を思いきり吸い込んだ。

ふと周りを見回せば、すでに鍋の下では火がたかれて煙をあげ、集落は活動を開始していた。まだ東の空が白み始めたばかりだとうのに、なんともタフな人たちだ。

「おはようござい……ふああ……ます」

タイミングの悪いあくびをかみ殺しつつ、挨拶をする。さつちやんと佐々木さんは、僕が起きたときにはもう隣に座っていた。稲じいちゃんだけは、昨日人より遅くまで起きていたせいか、いまだに夢の中だ。

「おはよう
「おはようさん」

みんな元気よか（元気がいい）ねえ、なんて話しながら、僕もさつちやんの隣に腰を下ろした。

実際、祭りの後の寂しさなど感じていないかのよう、一様に里

の人たちはテンションが高い。体を温めているのかぴょこぴょこ飛び跳ねているおいさん（おじさん）とか、肩をぐるんぐるんまわして何かのやる気に満ち溢れているようなお姉ちゃんとか。

実は前日のお祭りは、本格的な収穫の前に最初の稲穂を捧げる感謝祭のようなもので、本番（稻刈り）は終わっていないのだ、ということ。ちょうどその準備をしている間にホノちゃんが行方不明になつて、ホノちゃんを探し回つていた結果、祭りを延期することになり、収穫期に食い込んでしまったのだということ。かと思えば、本人はふらつと帰つてきて、しかも神様（後になつてこそ笑い話にもなるけれど、僕たちのことを本当にそう思ついたらしい）をつれてきたので、例年以上のお祭り騒ぎになつたのだ、ということを知るのはもう少し先になつてからの話だ。このときの僕たちは、何が始まるんだが……とハテナマークを浮かべるばかりなのだつた。

さて、遅れてもぞもぞ起きだしてきた稻じいちゃんを輪に入れて、村長直々に振舞つてもらつた朝ごはんの里芋とお団子を食べつつ、首をかしげていた。

ちなみにこの「村長」、本当に村長なのかはわからない。ただ、変な格好をしているのでもなく、いつも穏やかに笑つているだけなのに、思わず目を向けてしまうような、不思議な存在感をもつたお人だ。里の人たちにも敬われているようで、実際、周りの人々に指示を出しているのを何度も見かけた。それで、僕の中で勝手に「村長」と呼んでいる。村の人からは奥さん 昨日いろいろと世話を焼いてくれたおばさんは、この人の奥さんのようだったともども「ふいみ」、に近い呼び方をされているだけれど、これがどうも、日本人の舌では発音しづらいのだ。

話は戻つて、村長からもらつた朝食を、ありがたくいただいていたとき。トコトコと、ホノちゃんが腕に赤ちゃんを装備して現れた。昨日から、もうヌイちゃんを手放さないと決めたようで、何をするにしてもこの格好だ。

「まあよう

「まあよう」

またまた二つの間に覚えたのか、出合いで頭にジャブをもらつた。本当にこの子の記憶力はどうなつているんだろうか。

「おはよう」

「ホノばん、おはよう」

「おひ、おはよう」

佐々木さんは、「ん」と頷いただけだったけど、よく見ればいつもより一割り増しきらいにイイ顔をしている。

そんな僕たちをじり田に、ホノちゃんはヌイちゃんを落とさないよう抱えなおして、村長と一緒に話した後、反対の手でわっちやんの袖をひつぱつた。にこにこして、なんね？ と問いかけるさつちやんに、言葉を選んでくるのか”あー”とか、”んー”とか悩んでいる。

はつと名案を思ついたといつ顔で手を離したホノちゃんは、ヌイちゃんを抱いたまま、器用に腰をひねつて「いつつ」にいさんしー」と声を出した。それからさつちやんを指し、広場を指し、むこやむこやと何かを言つている。

残念ながら、すぐには意味が分からなかつたので、その後ホノちゃんの説明……ボディランゲージはしばらく続くことになつた。

さて、身振り手振りといふ名の異文化交流に決着がつき、ついでに朝ごはんもきれいに食べ終わり、ホノちゃんと村長に背中を文字通り押された結果、僕たちは広場の端っこ近くに並んで、正面から視線の集中砲火を浴びることになった。こちらに向き合つようと、学校の三・四クラス分くらいの人たちが、思い思いに間を空けて立つていて、僕たちはその前でお手本のポーズを取る。

つまりとにかく、皆の前でラジオ体操の実演をやつていいわけだ。

いつち　にい　さん　しい

「」お るつく しち はち

にい　にい　さん　しい……

掛け声と共にお手本として腕を振り、足を曲げ、それとも背中をそらせば、ぱらぱらと同じような格好が量産される。子供のころの運動会や、夏休みの朝を彷彿させる時間はしばらくの間続いた。

この村は、うち（公民館）からそう離れていないわけだし、まだ日本に帰れる見込みがない以上、これからお世話になることもあると思つ。指導をお願いされたのは予想外だったけど、ラジオ体操は本気でやれば病気になりにくくなると聞いたことがあつたから、し

つかり覚えてもらえばお礼の一つにもなるかな？　と話したものだつた。

さて、体操も終わり、一息ついて、ホノちゃんを筆頭とした何人かに「ありがとう」「言われたり、おそらくこちらの言葉でお礼を言われたりしていった最中のこと。お辞儀合戦をさえぎるように、村長が腹の底から出したような、低くて穏やかで、しかも大きな声で注意を引いた。急にしん……と静まりかえった広場の視線が一点に集中する。もちろん僕たちも何事かとそちらに目を向けた。村長は多少音量を下げた、それでもよく通る声で何か短く演説のようなことをしたのだと思う。残念ながら意味を把握することはできなかつたけど、決して悪い内容ではなかつたんだろ？。村長の最後の言葉が終わると同時に、周りから歓声が湧きおこつた。

皆が籠やら壺やらを持つてきて、中には腕を振り上げて喜んでいる人もいる。村のワンちゃん　^{とき}ビことなく公民館の近くを縄張りにしている野良犬たちに似ている　も興奮したようにほえていて、なんだらか、これから公民館に帰りたいですとは言い出しにくい雰囲気だ。

はたして村長の号令一下、準備運動を終わらせ氣を高まらせた一団は、わあっと^{とき}鬨の声も高らかに走り出し、一人くらいヒヤツハーとでも叫びだしそうな雰囲氣で、あるいは壁を乗り越え、あるいは門をぐぐり抜けて田んぼに突進していった。わっさわっさと飛んでいたとんぼの群れが、大きな音と迫る人の壁に驚いてぱっと散り、そしてじわじわと元の位置に戻っていく。田んぼの中から10羽、20羽ではきかないスズメの群れが飛び出して、背の高い草の陰から雉らしき鳥が一日散に逃げていく。

そしてかれらを驚かせた一団の中には、状況がよくわからないま

まに純日本産のことながれ主義を全力展開した、4人の外の人
言つまでもなく僕たち　がまぎれこんでいて。

僕たちが無事に根城まで帰還するのは、稻の収穫を全部手伝つて、
”本当の”収穫祭で年甲斐もなくはしゃぎ明かした後……十月も半
ばに差し掛かつてからのことだった。もつとも、それまでの間、猫
のえさやりや、最低限の畠の世話、自分たちの田んぼの様子見なん
かでちよくちよく帰つてはいたのだけど。基本的に引き止めてくれ
る村の人的好意に甘えてしまったのと、実際収穫期には人手があれ
ばあるだけありがたいのを知つていたから、村長の家に泊めてもら
つたりして、気がつけばずいぶんとたつてしまつていた。本物の豎
穴式住居に筵むしりをしいて寝るなんて、なかなかできない経験だつたと
思う。面白いことに、土の床はほんのり温かかった。

とはいへ、お米の収穫にどうして一ヶ月も、と思うかもしない。
けれども、そんなに時間がかかった理由は、別に急げて収穫してい
たからでも、道具がまずくて作業がはからなかつたからでもない。
確かに、道具といえば教科書でしか見たことのなかつた石包丁（！）
だつたから、初め内は山（公民館）から鎌を持って来た方がいいか
と思ったものだ。ところが、予備のものを貸してもらつて実際に使
つてみれば、これが思いのほかスムーズに収穫できた。だから、遅
くなつたのはそういうことじやないのだ。

問題はむしろ田んぼのほうだった。稻穂の間にたくさん生えてい
る雑草をよけて摘むのが大変だつたし、そもそも株によつて熟成度
合いがまちまちで、摘む前に実の詰まつた穂を搜さないといけない
のだ。そうして、毎日少しづつ収穫していつて、全部の田んぼ、株
を制圧したころには一ヶ月がたつっていた。日本においてはまず味わえ

ない、信じられないくらいおおらかな稻作だった。

さて、少し休んだら、今度はこぢらも頑張らないといけない。川端をさかのぼり、森をかき分けて、ようやく揃つて帰ってきた僕らの巣は、黄金色に色づいていて。ここ一月で見慣れてしまったそれよりは少し大きい稻の穂が、頭をたれて待っていた。

十四話 秋深く……（後書き）

遅くなつて本当にすみません。本来の仕事が忙しい時期なのに加えて、新しくパートの仕事も始めたもので、これからはかたつむり更新になると思います。この程度の文章しか書けませんが、これからも宜しくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8581u/>

日本 はじめました（改訂版）

2011年12月17日23時48分発行